

〈巡検記録〉

アコンカグア・キリマンジャロ登頂の記録

進 藤 賢 一・奈 良 亘・工 藤 俊 二

はじめに

赤道直下よりやや南に位置するアフリカ大陸最高峰キリマンジャロ山 (5,985m)、南米で最高峰、アルゼンチンのアンデス山脈に属するアコンカグア山 (6,959m) の登頂記録をここに収録する。

登山時期は、1997年1月にアコンカグア山、同年3月にキリマンジャロ山を登り、山頂に達した。

アコンカグアは奈良亘(経営学部4年)、キリマンジャロは工藤俊二(経済学部4年)と進藤賢一(経済学部教員)で、2人の学生はいずれも「進藤教養ゼミナール」最後の在学生達であった。

なお、奈良 亘は1997年12月にキリマンジャロ山登頂を果たしている。

これまでの教養ゼミナールは、春から秋にかけての週末や夏休みを利用し、大雪山系、日高山脈、暑寒別連峰、渡島半島の連山や羊蹄山、札幌近郊の丘陵性火山など北海道内の山々を中心に山行して植生や地形、地質などの観察を楽しんだ。

教養ゼミの終焉に伴って、海外の山行を思い立ち詳細を検討した結果、南半球の山々を選んだのである。

我々は冒険家ではないので、極度の危険を伴う山塊や難度の高い山に登頂することを目的としていないし、ピークアタッカーを主力にした山登りをしているわけでもない。

美しい自然を愛で、うまい空気を腹いっぱい吸い、下界にはない宝のような動植物に出会い、神秘的な雰囲気にとけ込んで、しばし自己を忘れ、たまには頭をからっぽにすることである。

山を歩いてさえいれば、行く先々に不思議な景色が登場し、この世から隔絶した気配が感じられる。そんな雰囲気を慕いながら、自然空間がもつ意外性や時代の変遷が相手側から近づいてくる面白さを楽しむのである。

外国の山々には、日本の山にはない風水や意外性がある。それは地域によっても、高さによっても異なっている。

そんな比較の勉強もいだろう。こんな体験はできる時にやらなければ終生できるものではない。

以下、楽しい山行記録であるので是非、ご一読いただきたい。

**遙かなる南米アコンカグア(6,959m)
登頂の記録**

1) 素敵な山々に魅せられて

北海道の屋根、大雪山や札幌近郊の山々は美しい。しかし、海外にも美しい山々があるはずだ。

教養ゼミ生の工藤は、担当の進藤先生とアフリカ最高峰のキリマンジャロ (5,895m) に登る計画である。

私は、北アメリカ、南アメリカ、オセアニアの三大陸の気ままの1人旅を楽しみながら、各地域の山々に登る。そのなかで最大の目標として南米最高峰のアコンカグア山に登頂する計画をたてたのである。

時期は1996年12月はじめから97年3月中旬の3か月半、単純な卒業旅行ではなく、楽しみ満載の1人貧乏旅である。

アコンカグア登山は1月から2月にかけての30日間、その体馴らしとしてブランカ山群（ペルーの最高峰ワスカラン6,768mを含む5000～6000mの山群）を歩く。

初めての外国旅行で、英語（南米は主にスペイン語）もろくに喋れない、お金も3か月半の滞在費、食費、交通費（往復航空運賃を除く）合わせて30万円、これで現地の飛行機、バスに乗り、宿に泊まり、飯を喰う。

さまざまな不安は付きまとうが、旅のスケールを考え、地図を見ているだけで胸がときめく。

この先、どんな場所を徘徊し、どんな人々に出会い、どんな事件が起き、どんな体験が自分を待っているかと思うと、不安どころか勇気さえ湧いてくる。

気ままな旅はなんとかなる。しかし、7,000mに近いアコンカグア（アルゼンチン）の登攀は、危険を伴うものであり、十分予備調査していかなければならない。

幸い、4月から就職が内定している旅行社「ノマド」では、旅行業のほか、国内外の山岳登山ガイドを実施しているため、この山に登頂した先輩がいる。

十分な情報を得ることができし、適切な助言が得られる幸運に恵まれていた。

多くの登山者は、登山隊を編成して複数メンバーで山に食らいつくが、私の場合は単独である。

1人のハンデがどのような形で現れてくるのか、その点も十分検討しておかなければならなかった。

2) 日本から南米ペルーに向かう

1996年12月9日、友達に見送られ千歳空港を出発し、成田経由でロスアンゼルスへ向かう。

成田ーロス11時間の直行便。太平洋をひと跨ぎだ。

ロス空港からバスに乗り、街に出て、宿を探し、飯を喰う。こうした段取りをするための英語力不足が出だしの英語圏からの戸惑いであった。これからは英語の勉強が必要だ、やるしかないと思った。

しかし、不思議になんとかなるものである。アメリカ人にもいい人がいるものだ。

ロスのハリウッド、チャイニーズシアター、ビバリヒルズ、サンタモニカを歩いてみた。

見えてくるものは、不自由のない生活、情報の氾濫、環境汚染と車社会、新鮮な感動が伝わってこない。先進国とはこういうものか。生きるため、喰うために最低限人間が必要としているものを求め、一生懸命生きている社会や、人間模様を見たかった。

市内、および郊外を歩いたあと、ロスアンゼルスからペルーの首都リマ行きの航空機に乗り込んだ。

この区間は成田ーロスよりもかなり距離が長い。滞空時間も13時間に達する。さすが、地球の最も膨らんだ部分を飛んでいるのである。

機上で日本人の漁師と隣席になった。

“海洋資源の乱獲で、日本付近の漁獲量が激減し、今、日本の漁師は漁業権料を支払ってペルー、チリの沖合いでの操業を余技なくさせられている”という。

日本の裏側まで日本人が押し寄せ、漁をしていることに驚かされた。

この漁師は、私になまりの強い漁師言葉でスペイン語の手ほどきをしてくれたが、彼の日本語もスペイン語も理解に苦しんだ。

これから行くペルー、チリ、アルゼンチンはいずれもスペイン語が母国語なのである。

こうした言葉は、日本で基礎を学んでおかなければ、すぐに理解することは難しい。

実際に、1, 2, 3から、こんにちわ、ありがとう、すら知らなかった。窓の外にリマの灯が近づいてきた。間もなくペルーに到着だ。

リマ空港は、午前1時頃にもかかわらず、タクシー、ホテルの呼び込み、送迎の人々で溢れていた。時間的にも深夜であり、セキュリティを考え、空港内のセイフティエリアのベンチの上で寝ることにした。

一歩外は治安がよくない様子が肌に伝わってきたからである。

翌朝、空港から外に出ると、「日本語、話せます。大丈夫」、「旅行会社の者です。安心、安心」などと、たどたどしい日本語で呼掛け、旅の切符、ホテルの予約をせがみ、タクシーに寄せようとして付きまってくる人々がいる。

本当に安心、大丈夫な奴が「私、安心、大丈夫」などというわけがない。

空港から街の中心街まで5～8ドル（タクシーにはメーターがないのですべて料金は交渉）なのに30ドルと言ったり、ホテル代もとんでもない価格をふっかけてくる。

結局、タクシーの運転手と交渉し、5ドルでダウンタウンまで行くことにした。ところが、この運転手、到着してから10ドルを請求し引き下がらない。もみ合ったが、9ドル支払う羽目になった。いい勉強になる。今後はこうしたことが起こりうることを前提に交渉するコツを憶えたからだ。

タクシーの窓から見るとリマの光景は強烈な世界であった。どの家も汚く、ボロで家の壁は、粘土のような赤土で出来ていて屋根がない家もあり、窓にガラスが入っていない家屋が立ち並んでいる。

半世紀も前に製造されたような車、車というより鋳の塊が道路を埋め尽くしている感じ

だ。

道路には信号もなく、クラクションは鳴りっぱなし、パチンコ屋に似た喧騒ぶりである。呆氣にとられたが、好奇心と恐怖心で体は震えていた。

3) 首都リマで強盗に襲われる

リマのセントロ（中心街）は近年治安が悪く、企業やサービス産業などの諸機能が隣のミラフローレス地区に移動しつつある。多くの旅行会社もそこに移った。

海浜は日光浴やサーフィン族で溢れ、ペルー経済の不況など、どこ吹く風である。

海辺のレストランでセビッチェ（シーフードマリネのようなペルーの民族料理）を食べ、インカ帝国遺物の博物館を見学し、海辺で読書をしていると、幸せの時間が過ぎていくのを実感する。

夕刻が近づく。夜は治安が悪くならうから、早めに数百メートル先の宿に帰ろうと小走りに走る。

何処からともなく隣に若者が現われ一緒に並んで走ってくる。汚い服とサンダルでどうも様子がおかしい。

突然、振り返り、胸ぐらをつかみ襲ってきた。「来たか！」ととっさに手を払いのけようとしたが、すぐに5, 6人に囲まれていた。彼らの行動は極めて敏速で訓練されているようだった。

いきなり殴る、蹴るの集中攻撃を受ける。1人が腕を、1人が足を、1人が体を押え、残りの連中がパンチとキックを容赦なく浴びせる。

「やめろ！」と抵抗したが、1人がナイフを取り出したので命の危険を感じた。

ここで怪我をしたり、命を落してもつまらない。なすがままにさせた。

「痛い！」

1人が全身くまなくボディチェックをする。

首掛けで隠し持っていた貴重品袋を発見するや否や、服を破り袋をちぎりとり、そのまま逃走していく。

この貴重品袋には財布の他に、パスポートと航空券が入っていた。

航空券とパスポートは取り戻さないと、この先3か月間旅行ができない。

彼らも必死なら、こちらしも必死だ。逃げる彼らを追いかけた。彼らは石を投げ、応戦しながら逃走していく。

彼らは、走りながらお金以外の不必要なものを捨てて行く。

パスポート、航空券、身分証明書などは、無残にも砂ぼこりの路上に捨てられていた。

道行く人々が、この光景を見るや否や、身を秘めた。巻き添えを嫌ったためであろう。

“ホッ”とした瞬間、体のあちこちが急に痛みだし、服は破れて、背中と手はナイフで切られ血が流れているのに気づいた。

孤独と不安が交錯し、精神的にもダメージを受けたが、異国での強盗事件は、日本が安全な国で、日本人はどこか無防備であることを強烈に印象づけた。

不幸中、幸いとでもいおうか、旅を続けるだけのお金は、宿のセーフティボックスに保管しておいたので、盗られた分は僅かであった。

「何が起ころうともおかしくない」と思うようになる。ペルーの経済状況を見ると、彼らも好んでやっているのではなく、生きて行くための精いっぱいの行動なのだと思えてくる。

そう考えると、腹立たしさも薄らいだ。

この直後、ペルー日本大使館事件が起った。

4) 高度順化のためのブランカ山群

トレッキング

南米最高峰アコンカグア山(6,959m)のブレ山行と高度順化を兼ねてペルー北部のブラ

ンカ山群に足を踏み入れることにした。

ブランカ山群は、ペルーの最高峰ワスカラン(6,768m)を主峰とし、5,000~6,000m峰がひしめいているが、高原の街ワラス(3,028m)はトレッキングの中心基地である。

リマからワラスまでは、夜行バスで8時間である。ワラスは周辺を高山に囲まれた盆地状の街であるが、メインストリートからワスカランを仰ぎ見ることができる景勝地だ。

登山シーズンは、6~9月の乾期が主力であり、街も賑わうが、12月は雨期で閑散としている。雨期といっても雨の降らない日々は空気が乾燥している感じである。

ワラスの街では、山のルートを調べ、情報を蒐集し、ガイド兼コックを1人雇うことでトレッキングに臨むことにした。

街なかに3軒の登山ショップがあり、どこも登山装備のレンタルやガイドの調達が可能である。

店の1つ「モントレック」は3泊4日のガイド料が、装備を含め80ドル(1日20ドル)、食事代20ドル(4日分)、交通費10ドルの合計で110ドルであった。

トレッキングルートは、ワスカラン国立公園のなかのバケリア谷から、途中標高5,000mに近いウニオン峠を登り、山々の展望を楽しんだあと、氷河地帯を歩き、氷河湖を巡って山中3泊4日を過ごし、サンタクルス谷を下山する。

標高5,000m付近を歩けるのは、高度順化にはもってこいの条件だ。

5) 標高4,000mで高山病と闘う

ブランカ山群には、現地ガイドのニーロと、リマで知り合った世界一周旅行中の3人でバスに乗り出発した。

この地方の乗合バスは屋根に荷物を乗せて運ぶよう指示しているが、私はザックを抱いて乗り込んだ。

バスの屋根荷台に荷物を乗せるふりをして反対側に落し、もう1人がそれを持って逃げる窃盗方式が横行している、と聞いたからだ。

カラフルな衣装の山岳民族や大きなイモ袋を担いだ農民、生きた山羊の足を縛ってバスに乗り込む人々がいて面白い。

2時間でユンガイに到着した。ここで水、パン、食材を調達し、山岳バスに乗り換える。

グートのヤングヌコ谷を進み、エメラルドグリーンの水河湖を眺めながら、いっきにヤングヌコ峠(4,737m)まで登る。空気が薄く、息苦しいが、眼の前にはアンデスの雄大なパノラマが展開していた。

峠を越えた車道はジグザグしており、谷底には時折転落したバスの残骸を目撃することができた。

峠から約1,000m下ってバケリア谷(3,700m)で下車、ここがトレッキングの出発点である。高さは、ほぼ富士山頂に等しい。

トレッキングトレイルは、美しい登山道で自然を満喫しながら歩くイメージをもっていたが、実は山岳農民の家畜であるロバや牛、羊を歩かせる道を人間が通らせてもらっているような感じであった。

山岳民族インディヘナが、畑作業や編物、布織りをしている光景が見られ、民族の生業を見ながらのウォーキングだ。

子供達がやってきて「キャラメロ」といって手を差し出す。

標高が4,000mを超えるころから、頭痛が少しずつ強くなる。高山病だ。

バスで4,700mに達したときは、この頭痛はなかった。歩いていると、体が消耗し、酸素を体がかすめとって脳が酸欠状態になつていくのだ。

頭の奥に痛みの芯が生まれ、ギンギンと痛みが走る。

ペルーの山岳地帯では、頭痛を和らげるため、コカインの葉をお茶(マテデコカ)にして飲むか、直接、葉を噛み幻覚作用で痛み



富士山頂に近い標高のバケリア谷(アンデス山中)に住む山岳民族インデヘナの子供達。
キャラメルを欲しがり手を出す。

を軽減する人々がいる。

農作業で重労働が続くときは、何枚ものコカインの葉を唇の下に挟んで作業をする。

ウニオン峠を前に、4,200m地点にテントを張りキャンプ。夏だというのに降雪があり、一面銀世界である。

一晩中、頭痛に悩み、空気が薄いことによる息苦しさに熟睡できない。食欲もない。

翌日、頭痛、吐き気をおして歩き始め、最高到着点のウニオン峠(4,750m)にたどり着く。高度を稼ぐに従って頭痛はひどくなり、峠に着いたころは思考停止の状態、景色をめでる余裕すらなくなっていた。

これから登るアコンカグア山頂は、これより2,200mほど高い。高度順化の必要性を強く感じた。

ウニオン峠を下り始めると、急に体が楽になりはじめた。酸素が少しずつ供給されはじめたようだ。

登りほど体力を消耗しないから、酸素が脳にもめぐってきはじめた証拠か。歌を唄っての下りができるのは体調が回復している証明である。

右手には世界一美しいといわれるアルパマヨ山(5,947m)が顔をみせた。

3日目の夜は雨になった。テントは設営せ

ず、洞窟でビバークする。焚火で濡れた服を乾かし、焚火で食事をつくった。久しぶりの原始的生活である。こんな生活がこの土地にはよく似合っているのかもしれない、思った。

4日目、サンタクルス谷沿いの急な坂道を下ってカシャバンバ村(2,900m)に辿りつき、今回のトレッキングは終了した。

無事に下山できたことを祝って登山ガイドのニーロらと乾杯、このビールの旨さは忘れられない。

バスでワラスの街にもどった。



標高2900mのモンテレーでのロッククライミング。
アコンカグアに備えてのトレーニングである。
写真は奈良亘。

翌日は近くのモンテレーでロッククライミングに挑戦した。これは、日本でもよくやっている所以で自信があった。いい壁を5、6本登って手ごたえを確かめ、アコンカグアに備える。

モンテレーには温泉が湧いていて、トレッキングの疲れを癒すには絶好の環境だ。そのまま、リマに戻って、はじめて日本大使館がテロリストに占拠されていることを知った。

6) 思いがけないクリスマスへの招待

人口90万人、ペルー第2の都市アレキパ(標

高2,380m)を目指した。

錫やセメント、ビール、製糸で知られた工業の街であるが、ビール(セルベッサ)はとりわけ旨い。アレキパ特産のアレキパーニャだ。

途中、バスのなかで神戸で技術研修をしたことのあるウィリアムというペルー人に会った。今はリマの商社に勤めているが、年末の休みで実家のあるアレキパに帰るところだ。

日本語、英語、スペイン語を折り混ぜてペルー事情を話す。アレキパの街を案内したり、安宿を探してくれた。

自分も住んだことのある日本の人が、自分の故郷アレキパを訪問してくれたのが余程嬉しかったらしい。

安宿の最上階でアレキパーニャ(ビール)片手に、ミスティー山(6,096m)やチャチャニ山(6,075m)の雪に覆われた秀峰を眺め、街行く人々をぼんやり見ていると年末の日本の光景が、ふと脳裏をかすめる。

突然、先ほどのウィリアムから電話があり、「今から、家族でクリスマスパーティーをやるから君も来ないか、マミーも歓迎さ」と。

10分後に迎えのタクシーがやってきた。

招待されたのは、アラバalez家で、両親と長女で高校生のバージニア、姪のマリア、長男のウィリアムスがいた。

言葉の壁はあるものの、かれらはペルーの自慢話をする。バージニアは日本で働く、スチュワーデスになる、日本語を知る方法など、矢継ぎ早に相談してきた。

食事はスープに続いて、「クイ」というギニアピッグ(モルモット)がでてきた。これは、山岳民族の貴重な蛋白源として重宝がられているものだ。

内心、“参った”と思った。食べれるだろうか。

まず、ゆでて皮をむしり味付けするが、僕の皿には4等分した右後ろ足の肉片が原型を

残したまま盛られている。

みんな旨い、旨いといって骨までしゃぶっている。皮は硬く、肉は臭味がありおいしいとは言えない。それより気味が悪い。

“味はどうだ？”と聞かれ、笑ってごまかすよりしかたなかった。

この「クイ」料理は、正月とか誕生日に食べるご馳走だという。

地球上には、数々の民族がいて、それぞれが固有の生活をし、その地で生きようとする魂をもっている。その一面をかいま見ることができ、素晴らしい人との出会い、思いがけないクリスマスに感無量になった。

7) グランドキャニオンより深い谷を

「デル・コルカ」

ペルーのアレキパからチリの首都サンチアゴを経由し、アコンカグアの登山基地であるメンドサまでバスで40時間の行程である。砂漠と山岳地帯を貫く地獄の旅といっている。

砂漠のような山岳地帯をバスが走ることで10時間で「キャニオン・デル・コルカ」の谷にでる。

羊より大型の家畜が散見できる。標高3,000mから4,000mに生活する人々にとってリャマやアルパカは貴重な家畜だ。

リャマは運搬用に飼育され、アルパカは毛織物の原料になる。アルパカ毛は、羊毛に比べ、保温性が優れていること、肌触りがよいことで珍重がられている。セーターやカーペットにはもってこいの素材だ。

キリンのような顔つきで可愛く、体はキリンほど大きくはないし首も短い。

ゲート道を走り続けて10時間、「キャニオン・デル・コルカ」に着いた。

コルカ川の切込みは2,000mにも達するのであろうか。自然が造りだした造形美に、ただただ感動した。

タイミングよくコンドルが姿を現した。「エ

ル・コンドル・デ・パサ」のメロデーが聞こえてきそうである。

コンドルはペルーを代表する鳥で、古代から「神の使者」として崇められてきた。

果てしなく続く渓谷に、ゆっくり、ゆったりコンドルの舞う姿を見ていると、いつか夢みたアンデスが現実になったのだと思う。

さらに22時間バスに揺られてチリの首都サンチアゴに着いた。

本来なら休養のためこの街に滞在したいのであるが、あと数時間走れ南米旅行最大の目的地アコンカグアが見える位置にきているのではないかと、思うとすぐに出発することになった。

サンチアゴからチリ・アルゼンチンの国境は近い。国境で出国手続きを済ませ、バスはメンドサに向かって走る。

空は雲1つない晴天である。乾燥しているし、空気も澄んでいる。地図で確かめても、ドライバーに聞いてもアコンカグアの見える位置は近い。

興奮が体のなかを駆けめぐる。ドキドキがとまらない。待ちに待った希望の山である。

「デター！」、山間の谷間から山頂に雪を冠したアコンカグア山が姿を現した。

“凄い、さすが7,000m級、南米最高峰”，緊張していた体の力が抜け、ただただ仰ぎみていた。

一人バスの中で、にやけている自分が恥ずかしかったが、嬉しさがこみ上げてくる。

アコンカグアはインディオ語で「石の番人」の意味で、その名にふさわしく樹木も少なく乾燥した岩ばかりの巨大な山である。

この山に登るために遠く日本からやってきたのだと思うと感慨ひとしおになってくる。

8) 登山基地はワインの街メンドサ

あこがれのアコンカグアと初対面して興奮もさめやらぬうちにメンドサに到着した。

地中海性気候の夏にあたり空気は乾燥しているが、気温があまり高くなく快適な気分になる。周辺には広大な葡萄畑が展開し、いかにもワイン生産量世界第4位国の中心軸メンドサらしい。

上質なワインを生み出す背景は、豊かな土地グリーンベルトにある。

アンデスの豊富な雪解け水を利用し、大規模な灌漑によって生まれた緑の空間だ。

ワインの一大産地のメンドサでは、美味しい上質のもの1リットル100円程度で喉を潤すことができる。

アコンカグアを目指す人々が必ず訪れる町メンドサには、登山用具、登山用食糧、登山ガイド、その他登山やトレッキングに必要なものは何でも揃っている。

世界中から、この山に魅せられた人々がやってくるからだ。

メンドサの宿は、その名も「民宿アコンカグア」にした。日本人の増田夫妻が経営しており、アットホームな雰囲気が登山愛好者やトレkkerに人気がある。

場所は街の中心から車で20分程度、しかし、1泊25アメリカドルで貧乏旅行の身には、かなり高い感じがした。

過去の宿泊者名簿を見る。植村直巳、三浦雄一郎、長谷川恒夫など聞き覚えのある登山家や冒険野郎の名前がある。

過去の登山者が残した情報ノートがあり、びっしりアコンカグア登山に関係するインフォメーションが書き込まれていた。

病死や滑落死、墮落死など、さまざまな死亡例、高山病が悪化して脳性マヒや半身付随になった事例が記されている。

登頂に成功した5人の日本人パーティーが下山し、同宿であったので情報を得るためにもう1泊することにした。

彼らは、合計20日間を費やして登頂した。途中高山病で1人は断念している。

残り4人も希薄な大気と闘いながら、意識

を取り戻しつつフラフラの登頂だったという。

やはり、7,000m級の山はそう簡単に人間の挑戦を受け入れてはくれない。

山頂付近は零下20～30度であり、100リットルのザックは登山用具で満杯になった。

9) あわただしいアコンカグア登山準備

アコンカグアに登るには、登山許可証が必要である。市内中心部からコレクティーボ(乗合バス)で15分のサンマルティン公園のなかにある観光局に行くのだが、この程度の距離は歩くことにしている。初めての街はできるだけ歩く方がいい。

歩いていると、珍しいものや、意外なものに出会ったり、土地勘ができてくる。後から地図をみても街の輪郭が分かりやすくなるものだ。

観光局で80アメリカドルを支払って入山許可証を手に入れた。地図も日本の2万5000分の1地形図のような精度の高いものを欲しかったが、なかった。

簡単な写真と登山ルートの描かれたものが10ドルもしたが、これでも仕方がない。

基本的な登山用具は日本から持参してきたが、重さがあり、かさばる物(プラスチックブーツ、アイゼンなど)は現地で調達することになっていた。

スポーツ店「ORVIZ」が、比較的品揃えもよく、店主が山好きの男で英語も少し話すので、値段の交渉もできた。

ここで、プラブーツ(80ドル)、アイゼン(30ドル)、ストック(20ドル)を借用することにした。当初合わせて200ドルと店主がいていた値段を70ドル値引きさせたのもつかのま、デポジット400ドルは置いていけ、という。

品物が無事もどった場合、返還するとのことである。

これは、クレジットカードで済ませた。

燃料である。南米では、日本で使っているようなコンパクトガス（EPIやキャンピングガス）は入手しにくい、との情報を得ていた。もちろん日本から航空機で持参することはできない。

それで今回はガソリンストーブを使うことにし、現地でホワイトガソリン（ソルバンテ）を探すことにした。これは、金物屋（フェレテリア）で販売している。

質のいいガソリン2リットルを購入しペットボトルに詰め替える。

食糧は14日分、とりあえず用意することにした。

中継キャンプ地まで2日分、BCでの6日分、キャンプ1で2日分、キャンプ2で1日分、予備日3日分で、主食は米、パスタ、おかずは野菜、嗜好品など42食分をシュミレーションしながら決め、合計を73ドルで購入した。



アコンカグア登攀のための42食分。

主食米のほか、パスタ、缶詰、チーズ、ソーセージ、調味料、ビールなど73US\$で購入した。

食材は、軽くてパワーがでるものに限られる。荷上げできる重さがかぎられているので充分吟味することが重要である。

登山基地の宿は「カンポ・デ・バアーセ」（ベースキャンプの意）で1泊7ドルの安宿、ここには世界各国からクライマーが集まってくる。

人工壁で仕切られ、簡易ベッドが置いてあるだけの宿であるが、食事は悪くない。

山好きの欧米人は、日本のことに興味があるらしく、好意的に話かけてくれる。

セルベッサを飲みながら、談笑のうちにアコンカグア登山口の街メンドサの夜はふけていった。

10) 「'97 Aconcagua単独登頂」開始

1月13日（月曜日）。準備万端、いよいよ南米最高峰に向けての出発である。

早朝であるが、闇夜をタクシーでバスターミナルへ。天候は曇り、次第に東の空が明るくなって来る。朝焼けが燃えるようにメンドサの街を紅く染めていく。

バスターミナルで荷物を測ったら、ザックは20kg、食糧・装備・ガソリンで30kg、その他を合わせ60kgに達していた。

当初、1人で担いで登るつもりでいたが、それは無理であることが分かり、急遽、ムーラ（ロバの一種）に半分運ばせることにした。

ムーラは登山口で直接手配することとする。バスは約4時間で、登山口の村「プエンテ・デル・インカ」（インカの橋）に到着した。

温泉に含まれる鉱物が固まってできた天然の橋がある。スキー場があり、ホテルが林立する高級リゾート地である。

ムーラを探すため、いたるところ走り回った。なかなか値段で折り合いがつかない。1頭200ドルであれば、簡単に借りられるが、100ドルがせいぜいの値切り価格。ムーラは1頭60kgを運ばせることができるが、今回は30kg程度運んでくれればよい。残り30kgは自分で運び上げる。そういっても商談にはなかなか応じてくれない。

結局、アルゼンチン隊とムーラを共同利用することで50ドルで決着をつけた。

何事も辛抱強くやることだ。

「プエンテ・デル・インカ」を12時30分に

出発し、舗装道路を歩き、レンジャーの詰所がある登山口には14時ちょうどに着いた。

途中、遠いのと暑いのとで、ヒッチハイクをしたため、時間はかなり早く着いたことになる。

登山口では、番号の入ったゴミ袋を渡された。登山中に出たゴミはすべて持ち帰ることが義務づけられているのだ。

日本の登山システムの遅れを痛感した。



標高3250mの登山開始地点にアンデス山脈最高峰のアコンカグア山のピークが見える。

眼の前に7,000mのアコンカグアがドデンと立ちはだかっている。あまりにも巨大で、あまりにも遠い。なんとも果てしない道のが待っている。

11) ベースキャンプ (4,200m) を目指す

1月13日 (月曜日)

ベースキャンプの『プラザ・デ・ムーラス』(4,200m)までは、1泊2日の行程。オルコネス谷に沿い、美しい高山植物が咲き乱れる草原を歩き、途中「コンフルエンシア」のキャンプ地に泊まる。

天気は快晴だが、風が強く、乾燥度が凄い。

各国の登山家達と話ながらゆっくり登って行く。体調は文句なくいい。

通常、4時間のコースを3時間弱で来ている。

16時50分、1泊目の「コンフルエンシア」に到着した。水場もあり、快適なテント場である。

連日の緊張や、蚊の攻撃で寝不足が続いていたので、20時には早々に就寝。

1月14日 (火曜日)

2日目、9時に「コンフルエンシア」を出発し、ベースキャンプに向かって草原の山道をひたすら歩いた。休憩もほとんどとらずに歩き続けた。

8時間かかりベースキャンプ(BC)となる「プラザ・デ・ムーラス」に着く。

ここで、困難な問題が発生した。アルゼンチン隊と共同でムーラ(ロバ)に預けた3個の荷物の内、BCに到着していたのは1個だけである。

食糧、とくにパワー源になるものが到着していないので荷上げができない。到着先の山小屋に怒鳴り込み、怒った。

“ムーラが怪我をしたから”というが、怪しい。“明日の14時頃着くであろう”とつれないことば。

食糧が届かなければ、飯が喰えない。若干の食べ物があったが3食分にはならない。

山小屋に抗議し、とりあえずディナーは無料で提供させた。これがうまい。

1月15日 (水曜日)

この日はベースキャンプ(4,200m)からキャンプ1(5,212m)に荷上げの予定であったが、荷が届かない。

1日、山を見てボーツと過ごす。澄みきった空気を体いっぱい吹い、何もしないのも悪くない。

昨夜、テントの外に出てみると、満天の星であった。まさに星の海である。

外気はもちろんマイナスで凄く寒い、星を眺めていると、なにか優しい気持ちになれる。

早朝も寒かったが、テントのなかで寝袋に

くるまっていると、太陽の上昇とともに気温が上がってくるのがわかる。

太陽が頭上にくると、BC (ベースキャンプ) はもう楽園になる。天国にいるようなすてきな空間にかわる。

1日遅れでムーラも到着しているであろう。荷物も届いているであろう。

テントから山小屋まで20分を歩いて荷物のピックアップにでかけた。

が、どうしたことか、荷物は1つしかきていない。残る1つは届いていないのだ。

怒りは頂点に達し山小屋で爆発した。

無線で出発点のムーラの管理小屋に連絡すると、まだ、残っているという。

むかむかするだけで、怒りの表現の仕方がわからない。英語でもスペイン語でも表現することができない。

この時ほど、英語力・語学力の向上を痛感したことはない。腹はたつが、語学を学ぶ決意がでてきただけ感謝すべきか。

「災い転じて福となす」何事もプラス思考でいくことがいい。

12) キャンプ1 (C1) 「カンビオ・デ・ペンディエンテ (5,212m)」

1月16日 (木曜日)

BC (4,200m) より高度順化と荷上げを兼ねてC1 (5,212m) まで往復する。

標高差1,000m, ごろごろした小石のある山道をジグザグ歩いて高度を稼ぐ。

ただ、ひたすら登るだけで4時間かかった。非常に疲れる。標高は富士山を遙かに越えている。

かすかに、外国隊のテントが見えてきた。

CIには、「カンビオ・デ・ペンディエンテ」(5,212m) と「ニド・デ・コンドル」(5,365m) がある。

「カンビオ」は傾斜が比較的緩く、整地さえすればテント場が広くとれる。また、遅くま

で雪渓が残り、取水には便利なところだ。

CIは、この「カンビオ」に設営することに決めた。

途中、標高5,000mを越えるあたりから、徐々に頭痛がしてくる。軽い高山病である。空気の薄いのも実感できるのだ。いくら長く休んでも10歩あるけば息が乱れてくる。

通常は、前進キャンプ1と2に1張りずつのテントを設営し、1つは荷物置き場にするのだが、1つしか持ち合わせていないので、荷上げした食糧などは、袋詰めにし、石で囲んでデポする。

下りは、細かい石がクッションの役割を果たし、衝撃が少ないので、重力のなすがままだにストックを使い、まるでスキーでも滑るように小走りに降りることができた。

標高差1,000mの下りはBCまで、わずか45分である。

空気が濃くなった感じで、いつか高山病は消えていた。本来ならこれを3、4回繰り返せば、高度順化には一番いいのであろう。

山小屋に、ムーラに運ばせた荷物を取りに行く。2日かけてようやく3つの荷物が揃った。

文句をいい、交渉の結果、ムーラ代50ドルは、後腐れなく返還された。荷物が日付通り、時間通り来ないのは当り前のことだ、ということも分かった。

夕食は、届いた食材で豪華にやった。といっても、パスタに、缶詰、野菜少々、チーズ位のものであるが、標高4,200mの山ではご馳走である。

13) 激しく変わる山の天気のほか、再びC1に向かう

1月17日 (金曜日)

下山のときの食糧を、少々岩の下にデポし、BCの荷物をまとめ、テントをかたづける。

昨日とは打って変わって重たい荷物を担



キャンプ1 (標高5200m) 地点。「カンビオ・デ・ベンディエンテ」にテントを張り、高度順化をくり返す。氷柱はとがして水にする。

ぎ、再び昨日のルートをC 1 (キャンプ1) にむかう。

ゆっくり、ゆっくり歩いた。歩いては止まり、止っては歩いた。深呼吸を繰り返し、牛歩の如く進んだ。人間の足とは有難いもの、ゆっくりでも確実に前進し、高度を稼いでくれる。



一人、キャンプ1にテントを張る。
さびしくもあり、楽しくもある。
一夜にして乾いた大地が雪に変わる。

5,000mを越えるあたりから、横殴りの雪が全身を叩きはじめる。昨日、この辺りは、強いひざしと乾燥した空気、無風のカラカラ地帯であったが、今日は、打って変わって猛烈なブリザードである。

山は、時に優しく、時に厳しい。いい教師

である。

ブリザードは一向に弱まる気配はない。強風のなかでテントを設営した。これから先、厳しい世界が待ち受けていることを予感させる。

数時間後、辺りは一面雪の世界にかわり、昨日とは別の山にいる感じになった。

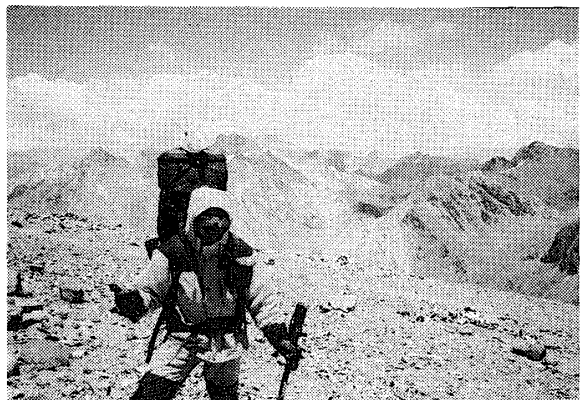
テントのなかで、雪を溶かし、夕食の準備をした。ご飯、ソーセージ、ナス、ニンニクのトマトソースあえ、とろりんチーズのメニュー。なんとも旨い。

少々豪華であるが、1人でいると食事が楽しみになるし、食糧は消費しなければ荷物になってしまう。

C 1 (5,212m) の夜から朝方にかけては、ベースキャンプとは比べものにならない寒さだ。ダウンの上下を着込み、冬用のシュラフへ潜り込んでも身は凍てつく寒さである。

14) C 1 「カンビオ」からC 2 「ベルリン」 (5,950m) へ

1月18日 (土曜日)



標高6000m地点のキャンプ2。

C 2 の「ベルリンキャンプ」(5950m) と「ニド・デ・コンドル」(5365m) の標高差738mを往復し高度順化に備える。

今日は高度順化の日、C 2 「ベルリンキャンプ」(5,950m) まで標高差738mを往復する。

「ニド・デ・コンドル」(5365m)まで、雪溪の残る斜面を進み50分だ。

そこから、北面の頂上に向い、南側に延びているリッジの横斜面をジグザグにトラバースしながら登る。

普通4時間かかるところを2時間程度で到着した。昨日の高山病が消えていて気分的には快調であるが、体力の消耗は著しい。

ベルリンキャンプには、避難小屋が何軒かあるが、いずれも狭くこわれているものが多い。

中を覗いてみると、暗くうす汚れている。なにか動くものがある。登山者が宿泊しているらしい。

テント場は地面が岩盤でペグが使えない。大きめの石でテントを固定する。風が強くなればテントの内側にも岩石を持込み固定する必要がある。

水は雪溪が氷状になっているが、それを溶かして使う。トイレがなく岩場近くが、いわゆるクソ場になっていて汚れている。

ベルリンキャンプ(5,950m)は、丁度アフリカ大陸最高峰のキリマンジャロとほぼ同じ標高で、酸素量は平地の半分以下になっている。

いまのところ、高度障害はなく、空気が薄いので呼吸が苦しいのを除けば調子は良好だ。

明後日にはここまでテントを担ぎ上げ設営する。ここが、最終キャンプ地、アコンカグア登頂の最前線基地まで辿りついている。

よく、ここまで来たものだ。“南米大陸の最高峰に登りたい”ただ、それだけの欲求があっただけで、よくも人間はこんなところまでやって来れるものである。

“勇気と行動力があれば、かなりのことは実現できる。そんな自信のようなものが湧いてきた。いまは凄い充実感がある。しかし、まだ登頂したわけではない。

これからの標高差1,000mが、危険でもあ

り、また慎重さが求められる。

15) 登頂のためのパワーを貯える高度順化日

1月19日（日曜日）

標高7,000mのピークに立つには、5,000m～6,000mで徹底した高度順化が必要だ。限界に近いところまで登り、体を酷使する。降りて休息をとり、疲労を回復させてパワーを貯える。この動作の繰り返しによって平地の半分以下の酸素量に耐える体力を維持するのだ。体力に余裕がないと、登ることはできても、降りることが難しい。

C2から、C1(5,212m)に降りて1日休養した。この休養日は実に気持ちがいい。

食事時に飯を喰い、本を読み、昼寝をし、トイレにいった、夕陽を眺め、シュラフに潜り込んでごろごろする1日である。

5,000mの山の上で贅沢な時間が過ぎていく。日本のことが脳裏に浮かんで消える。卒業を間近に控えた今ごろ、日本にいればスノーボードに興じ、バイトで汗をかき、仲間と飲み明かしていただろう。

今は、たった1人、地球の裏側、日本の対せき点（地球の中心を突き抜けて反対側）に来て、5,000mの山の上にいる。学生最後の締めくり方として、最高の思い、感覚に潤っている。

約6,000mのC2から、標高にして800m降りてきたことは、体調をことのほかよく感じさせるものである。

夕陽が沈み、オレンジ色の陽光が雲を染めていた。太陽が雲のなかに落ち、夕焼けがとうのいていく。今は雲より遙かに高い位置に身を置いているのである。

ブルーとオレンジのスカイラインが空と雲の間に線を引く。

心に染まるこの景色をテントの中で、一人ポツンと眺めていた。

16) C 2 ベルリン (5950m) に、 最終キャンプを設営

1 月 20 日 (月曜日)

1 昨日、軽い荷物を背負い、高度順化のためベルリンまで来ている。従って、体はある程度、高度に順応しているとの自信があった。しかし、今日はテントや食糧などかなり重いものを担いで来た。体が酸素を消耗しすぎ、頭に回ってこないのか、高山病の症状が出始める。

テント設営の作業 1 つ 1 つが凄く疲れ、だるい。

6,400m の「インデペンデンシア小屋」まで往復し、明日のピークアタックに備えようと歩きはじめたが、一步手前で断念せざるをえなかった。

頭の内側を針で刺されているような頭痛が絶え間なく続く。自分の体を意志どおりうまく操れない、力のバランスがとれない、典型的高山病の症状である。

風の強いベルリンキャンプでは、人が飛ばされ、凍傷になることがよくある、と聞いていた。

外気は零下 30 度以下、テントのなかでも零下 10 度以下である。

夜になっても寒さと息苦しきで、なかなか寝つかれない、熟睡出来ない。

シャツ、フリース、タイツ、靴下 2 重、ダウン上下、冬用ジャケットを身につけ、冬用スリーピングバックにくるまるが、吐いた息が氷の結晶となって寝袋に付着する寒さ。全身が凍てついていきそうな寒さである。

全く食欲がない。しかし、ここは最終キャンプだ。無理やり食べ物を口のなかに押し込む。頭が痛い。

17) アコンカグア (6,959m) の登頂に成功

1 月 21 日 (月曜日)

ピークアタックには、最終キャンプから山頂まで往復 10 時間はかかる。ベルリンキャンプを 6 時丁度に出発し、遅くとも天候が変わり易くなる 15 時前には山頂に着かなければならない。最も注意しなければいけないのは、防寒である。羽毛服、手袋、帽子、靴下など厳寒のなかで耐えうるものを用意してきた。

ベルリンキャンプ (5,950m) から、正面右手にはっきりしたトレイルが続いている。それに沿って脆い岩場を階段状に登る。

ガレ場をトラバースして約 1 時間で左のリッジにでる。見るみるベルリンのテント場が小さくかすんでいく。

ずっと強風が吹き荒れている。リッジの北側に回り込むと、さらに風は強まる。

北側の砂地の急傾斜を強風にあおられながらジグザグに登り、左上の岩峰の科尔 (サドル) を目指す。

科尔のインデペンデンシア (6,300m) の壊れた避難小屋付近で、外国隊のメンバーが嘔吐し、動けなくなっていた。この人はピークアタックを諦め戻るしかない。

全身がふらついている。私も戻りたい。しかし、戻るわけにはいかない。

さらに、右上の科尔を目指し、雪渓を登っていく。約 30 分で科尔 (6,350m) に達する。

ここから再びトレイルが西側に移り、頂上岩峰の大トラバース (スパーキャナレーター) がはまじまる。

このトラバースは風の通り道で避けようがない 2 時間のコース。終了地点が 6,600m 標高だ。

頂上稜線へ延びるルンゼ状の登りが続く。ルンゼ内は足場が悪く、かつ崩れ易いので神経の集中が要求される。

2 歩進み 1 歩下がる感じで、この間約 3 時間。ルンゼの終わり付近はまた雪渓になり、

アイゼンを使う。

頂上稜線 (6,850~6,900m) にでると、明瞭なトレイルを進み。南壁を見ながら左上の頂上を目指す。

この付近になると、頭痛がさらに激しさを増し、睡魔が襲い、集中力が失われ、バランスがとれない。夢遊病者のように自分を失いかけているのを動物的本能で支えている感じである。

後は、気合いの問題だ、と自分に言い聞かせる。頂上はもう目と鼻の先だ。

一刻も早く山頂に辿りつきたい。はやる気持ちとは裏腹に足が重く、体の操作がしにくい。

最後に、稜線を左から回り込み、岩場を乗り越え山頂に立つ。

ついに、南半球、アンデス山脈、南米大陸のいずれもの最高峰アコンカグア山 (6,959m) に自分の足跡を刻み込むことができた。

山頂の十字架が、到着を歓迎しているように見えた。



たった一人の登頂、アコンカグア山頂(6959m)。山頂の十字架が登頂を優しく歓迎してくれた。

14時45分、「ヤッター」、「ツ・イ・タ」以外何の言葉もでてこない。頭痛と達成感、だるさと睡魔、そして満足感。山頂に1時間半ほど留まった。

ガスが薄くかかって、本来なら太平洋も臨

める山頂であるが、今日は見えない。

登頂記念に石コロ1つを持参することにした。単なる石だが、俺にとってはなによりの宝物だ。プラブーツが重かったが逆立ちに挑戦し成功した。

体操部で長年鍛えた腕力は、こんな困難な条件のなかでも健在であった。

「さよなら・アコンカグア山頂よ」

頂上を後にしたのは、16時丁度。

ベルリンキャンプから登頂に擁した時間は予定の6時間を1時間オーバーし、山頂での滞在1.5時間を加えると8時間半で、やや時間を取りすぎている。

でも、当初最大8時間とみていたのだから、まああの線であろう。

ベルリンキャンプまでの下山には3時間を要した。

辿り着いてテントに転がり込む。飯も喰わずに寝たい。寝袋に潜り込んでようやく感動が湧いてきた。

「今日という日が無事やってきた。これ以上の幸せはない。自分の夢を実現した日。自分の歴史に残る最高の日。生きていることはなんと素晴らしいことであろうか」

(奈良記)

アフリカ大陸キリマンジャロ山 (5,895m) 登頂の記録

1, ヘミングウェイと椎名誠のキリマンジャロ

“キリマンジャロは標高6,076メートル（その後の測量で5,895メートル・筆者）、雪に覆われた山でアフリカの最高峰といわれている。その西の山頂は、マサイ語でヌガイエ・ヌガイ、神の家と呼ばれているが、その近くに、干からびて凍りついた、1頭の豹の屍が横たわっている。それほど高いところで豹が何を求めているのか、説明し得た者は誰もいない”

この一節は、アーネスト・ヘミングウェイの「キリマンジャロの雪」の書き出しである。

彼は、1936年名著「キリマンジャロの雪」をエスクアイナ誌に発表しているが、この短編小説は、彼のアフリカ滞在中アメーバ赤痢にかかって、病床での思い付きを述べる部分が大半で、「キリマンジャロの雪」について述べる部分はほんの数行に過ぎない。

ただし、タンザニアのアルーシャ付近のサバナ地帯における野生動物の記述は見事である。

キリマンジャロ山を世界的に有名にしたのは、「キリマンジャロ・コーヒー」でもあろうが、主たる背景はヘミングウェイのこの「キリマンジャロの雪」ではないかと思う。

椎名誠が1991年に出版した「怪しい探検隊・アフリカ乱入」は、東アフリカのサバナ地帯での野生動物との遭遇、マサイ族との交流、ナイロビの街での強盗にあつての被害とならんで、キリマンジャロ山に登ったいきさつがかなり詳しく書かれていて面白い。

この書物のなかで椎名誠は、1人の登山家を含む5人のパーティで5,900mのキリマンジャロ山に挑んだが、登山家の大蔵喜福だけが山頂のウフルピークに達し、他の4人は5,700mのギルマンズポイントで引き返した、と書いている。

キボハット（4,700mの小屋）付近から高山病に悩まされ続けたことがその理由のようだ。

この山は登山路にさしたる危険はないが、高山病が難敵といえる。

登山経過については、椎名誠の記述と比較しながら後述する。

2, キリマンジャロ山はアフリカ最高峰 (5,895m) のコニーデ式火山

キリマンジャロ山（5,895m）は、ヘミングウェイの指摘を待つまでもなくアフリカ大陸の最高峰である。ヨーロッパ大陸の最高峰がアルプスのモンブラン山（4,807m）であるとの人気から登山者が急増しているが、実際はカフカス山脈のエルブルース山（5,642m）がヨーロッパ大陸にある以上、正確とはいえないし、オーストラリア大陸最高峰は、オーストラリアアルプス山脈のコジウスコ山（2,230m）ということになっているが、ニュージーランドのクック山（3,764m）やニューギニア島のジャヤ山（5,030m）は、オセアニアの範疇にはいるから、最高峰の意味合いがやや薄い。

「山高きをもって尊しせず」で、高ければいいわけではないが、好奇心の強い人間は高い所が好きである。

標高6,000mの山となれば、気圧も地上0mの1/2になる。平地が熱帯のジャングルでも山頂は氷河で覆われている。

途中、高度順化も兼ねて富士山頂と同じ3,700m付近で2泊し、体を高度に慣らす。

登山路でさしたる危険はなくても、高山病とは闘わなければならない。一度、アンデス山脈の3,300mから4,200m地点で一週間にわたり頭痛、めまい、吐き気などの症状に悩まされたことがあったから、この思いだけはしたくない。

今回は、ゼミナール学生の工藤君と一緒にというのも心強い。なにせ彼は、札幌大山岳同

好会の主将である。

「キリマンジャロ山行」のツアーを企画実施している札幌の「ノマド」を尋ねた。

「ノマド」には、2人の北海学園大山岳部出身者が主に「キリマンジャロ登山」を担当していた。

「ノマド」では、この会社の企画に参加しなくとも情報は提供します、との話はなし。「ノマド」に限らず、東京の「アルペン」などの会社の企画している「キリマンジャロ登山」は現地の会社一括して以来しているので経費は何処も変わらない。

12泊程度であれば50万円、サファリツアーを2日追加して60万円ほどである。

学生達は格安な航空券を探し、安宿に泊まり、危険な交通機関を利用する場合があるので、費用は、その半分ないしそれ以下で済むことになる。

ケニア、タンザニアは治安の状態が悪い。強盗、スリ、置ききに会うことも少なくないので安全の道を選ぶのが普通であるが。

3. タンザニアへの経路

（成田ーモスクワーケニアータンザニア）

キリマンジャロ山の登山ルートは、4コースあるといわれている。実際には山麓は複雑に幾通りもの登山路があるが、上に行くに従って山道が整理されていく。

そのなかで最もよく利用されているのがタンザニアの「モシ」から「マランゲート」を経由するものである。

一般的にはケニアの首都ナイロビからこ「モシ」に入るか、タンザニア第2の都市「アルーシヤ」の空港に降り立ち「モシ」を経由して「マランゲート」に到達するかである。

成田ーナイロビ（ケニア）は、「ノマド」が使っているパキスタンのカラチ経由、椎名誠らが利用したインドのボンベイ経由、アエロフロートのモスクワ経由などがあるが、アル

ーシヤ（タンザニア）空港に直接降り立つには、成田からアムステルダムを経由する方法がある。

私は、工藤俊二君とアエロフロートで出発することにした。12万円の各安航空券が入手できたからである。

この航空機は成田ーナイロビ往復の価格であるが（東京の格安店では10万円程度のところもある）、他の航空会社の18～22万円に比べて安い。ただし2週間に1便しか運行していないこと、モスクワでのトランジット（待ち時間）が往路で10時間、復路で18時間に及ぶ欠点がある。

しかし、学生と歩調をあわせるには、この程度のロスは覚悟しなければならない。

成田のアエロフロート機の待合室で出会う人々は大半が学生、卒業旅行の形式をとっている者もいるが、アフリカ各地でそれぞれの独自の目的で旅を企画していた学生が多く、彼らの目的地や旅の方法も多様であった。

1人旅もあれば、2～3人の友達と連れ添って行く者、外国語大学のスワヒリ語専攻の学生、登山やサファリ・ツアーを目的にする者などさまざまである。

成田ーモスクワ間の飛行時間は11時間30分（機は30分遅れた）、時差6時間あるので成田を13時に出発した機は、モスクワに現地時間の18時30分に着いた。

午前3時45分発ナイロビ行きまで10時間弱、空港ロビーで待たなければならない。午後8時を過ぎれば、品薄のレストランは2店ほど開いているが、空港内の店は殆どシャッターを下ろし、薄ぐらいロビーの椅子で睡眠をとるか、寝袋に身をくるんで寝るかしかない。何処から持ち込んできたか、ダンボールを下にして、毛布にくるまっている者もいる。

トランジット客にはサンドウィッチと飲料がレストランで受けられる黄色い食券が配られていた。

真夜中に、「ナイトショップ」なる店がシャ

ッターを開ける。

スコッチの「カティーサーク」が11ドル、「ジョニ黒」が20ドル、いずれも1リットル瓶で、ビールはコペンハーゲン産の「カールスバーグ」0.5リットルが1.5ドルと免税店並の価格である。

ここでは、アメリカ合衆国ドルが歓迎されていた。

モスクワ空港の照明器具の光量が不足しているせいか、全体が暗い。トイレは汚く水がでない。

古い柱時計があるが、時間が狂っている。

4、エジプトのカイロを経由ケニアへ (モスクワ-ナイロビ)

午前3時過ぎにケニアのナイロビ行くと、セネガルのダカール行きのアエロフロート機がモスクワを出発する。

モスクワまで同行した東京の学生達はセネガルの「福祉問題の研究」にでかけるのだ。

彼女達は、第二次大戦後の独立運動の経過を書いたウスマンの小説「セネガルの息子」なども読んでいた。

北大林学の学生はダカールからギニア湾岸のベナン(ベニンともいう)からニジェール、マリ、アルジェリアなどサハラ砂漠を縦断し、地中海を渡ってパリまでたどり着くのだという。

私達は、2月27日午前3時45分アエロフロート「AU154」機でエジプトのカイロ経由ナイロビに向かった。

モスクワ-カイロ-ナイロビは経線上ほぼ似た位置にある。だが緯線間隔ではモスクワ-カイロの緯度差26度、カイロ-ナイロビの緯度差31度であるから単純計算で距離がでてくる。

地球の円周は4万km、360度で割れば1度の距離は111km、モスクワ-カイロは約2,900km、カイロ-ナイロビは約3,400kmである。

したがって、飛行機が時速700kmで飛んだとすれば、前者は約4時間、後者は5時間半だ。

こんな馬鹿げた計算が案外、予測の根拠になる。案の定、そんな時間で各々の空港に到着することができた。

機内では、東京の女子学生と同席することになった。

サハラとエジプトなど中心に今回でアフリカは8回目、「神々の指紋」を読んで今年はエジプトを中心に見てみたい、とのことである。

英語の力がつくにしたがって外国旅行が意義あるものになっていく、と話している。

夜明け前のカイロは、一面砂漠である。次第に朝日があたりを明るく、土色に染めていく。これを砂漠カラーというのか。とにかく単調な世界である。

1時間のトランジット、機内で待たされる。

スチュワーデスが最後部座席で前椅子の背もたれを前に倒し休んでいる。トイレの水がでないので汚物が流れない、といっても取り合わないし、ナイロビの現地時間を聞いても知らない、というだけ。官僚的な対応である。

13時過ぎケニアのナイロビ空港に着いた。

小さなローカル空港のような感じを受ける。

5、税関係官にウィスキー1本盗られる (ナイロビ)

ナイロビは標高1,800mあるが、赤道に近いので強烈な太陽が滑走路を照りつけていた。

パスポートをチェックする窓口の手前で、税関係官が黄熱病予防接種のイエローカードの検閲をしている。

このカードには、“ケニア入国10日前までに予防注射をしておくこと”と書かれていたが、工藤君は小樽の検疫所にいく時間がなく、結果としては8日前に接種を受けてきた。

税関係官は、この点を指摘し、“ケニアへの入国ができない”と言い出した。

“日本大使館と連絡をとってみる”といったが、それを無視して取調室に連行された。

係官は、“私が指定するウイスキーを1本購入し、私に提供すれば通関はできる”という。

モスクワで購入した「カティーサーク」があったので、“これでどうか”と尋ねると“しかたがない”といって通関を許可した。

1リットル瓶で11ドルのものであったが、ナイロビの街では30ドルだ。

後で、市内の「ドゥ・ドゥ・ワールド」なる日本語の通じる旅行社に情報収集に行ったとき、“よくあることだ。警官、税関職員など公務員が賄賂を要求するのは当り前の社会である。不備を指摘されないようにしておくことが大切”といわれた。

10年も前の話になるが、南米はボリビアの首都ラパスからブラジルのサンパウロ行きの飛行機に乗る際、空港で預けた手荷物が、サンパウロでは鍵がこじ開けられ、土産用の時計やら電卓などが奪われたことがあった。

どちらかの国の空港職員の仕業だと思うのであるが、サンパウロ空港で文句をいっても、“他国から来た飛行機だ、我々はわからない”といってとりあわない。

スーツケースにベルトを巻いて出来るだけ、こじ開けにくい状況を作り出している人々を見かけるが、これも盗難予防の方法の1つかもしれない。

6、日本人学生のたまり場、

「ホテル・イクバル」

ナイロビ空港には、アエロフロート機で降り立つた学生集団が10数人いてジャンボタクシーを捕まえ「ホテル・イクバル」に行きたい人々を募っている。

もう、このナイロビに長く滞在している日本の学生が手際よく指示していた。

我々も、特に宿を決めているわけでもない。「地球の歩き方」に載っている安宿でツイン

の部屋であればいい。この宿は1人1泊500円程度の格安宿。セキュリティがしっかりしていること、街の中心部にあり交通、買物、食事などの便がよいことをよりどころに投宿することに決めたが、この宿のオーナーはイスラム教徒で、建前上酒、洗濯はダメなのが唯一の欠点だ、とのことだった。

タクシーはメーターがついていないのすべて運転手との交渉であるが、空港からホテルまで1人200円はバス並の運賃。

空港からタクシーで40分ほど走って街の中心「ヒルトンホテル」をやや東にいったところに「ホテル・イクバル」があった。

人で溢れている、まさに雑踏のなかに車が止まった。

ホテルの玄関先なのに物もらいが手を出し、観光案内の者やタクシードライバーやバス案内人が予約をとりに集まってくる。

ホテルの玄関から5mも離れていない歩道に10歳位の宿無し子供らしき2人が死んだように横たわっていたのが印象的であった。

2人の守衛が入口をしっかりと守っている。多くのホテルやレストラン、みやげ物店などの入口にはこうした守衛というか、私警のような者が見張りをしている。

チェックインを済ませ、部屋に入るとこぎれいなベッドが2つ。トイレ、洗面所、シャワーは共同利用になっていた。

ナイロビは、夜になっても摂氏30度と気温が下がらず、寝苦しい。

こぶりの蚊がいるので蚊取り線香を焚き、防虫スプレーを撒く。マラリヤ蚊なら後が恐い。

ホテルの共同シャワーは、1日のうちほんの僅かな時間しか湯がでない。湯どころか水が出ないこともある。水が出ないとトイレが詰まって使いにくい。トイレには便座のないものもある。

値段が格安であるから、こんなものと割り切ればよい。

この宿にはドミトリ形式の部屋もあり、バックパッカーに1泊400円くらいでベッドを提供していたが、多少汚れており、ベッドの上にスリーピングバックを敷いてそのなかのくるまって寝ている者もいるほどだ。

11か月間この街にスワヒリ語を習いにきて明日、日本に帰国する学生カップルがいた。

“スワヒリ語はほぼ理解できるようになったので、日本の大学を卒業後はアフリカで仕事をしたい”，“交通事故死が死亡順位のトップで怪我人も多いから注意”，“スリや置き引き、強盗もいるが、いい人々が多いので過ごし易い国です”という。

車は多いが、大半は中古車輸入であり、この留学生は“過日もブレーキの利かないバスが下り坂を突進して横転し、3人が死亡した現場を見た、ともいった。

7. 人々の行動様式を知れば楽しいナイロビの街、だが危険が多い。

日本大使館や旅行社に行くかたわらナイロビの中心街を歩いてみた。

バケツをやけになって叩き、物乞いをする4、5歳の子供、義肢・義足・松葉杖の身障者達の物乞い、客引き、片かじりの日本語を意味もなく浴びせる人々。

殆ど黒人一色の世界である。この街は主にキクユ族で構成されているというが、他の少数部族も沢山住んでいる。

「ドゥ・ドゥ・ワールド」旅行社に、ケニアのナイロビからタンザニアのモシまで行くバスのキップを買いに出かけた。

ホテルの近くには、バスターミナルがあって10~12ドルで切符が購入できると聞いていたが、犯罪に巻き込まれる危険性もあるので、あえて外国人旅行者専用のシャトルバスに35ドル支払って乗ることにしたのである。

この旅行社には「らくがき帳」が置いてあ

り、日本から来た旅行者がどのようにして犯罪に遭遇したか、あるいは自身で考えていた土地柄とは大いに違っていた、などこの地域で過ごす便法などが書かれていた。

おもしろそうなものを紹介しておこう。これは事実だと思うからである。

1、ここに住んでいる人々は、タクシー代、旅行費用、あるいは露店での販売物は定価の2~3倍の値をつけてくる。計算はごまかしで過剰に請求する。

常に、値ぎることが前提になった価格体系である。

2、人通りの少ない道路脇の電話ボックスで友達に電話をし、夢中で話していた昼下がり、5人の強盗の襲われ、ボックスから引きずり出された。

大声を出したら人が何人か駆けつけたので強盗は逃げ、物は盗られなかった。

これは女性である。

3、夜、人どおりの少ない道を歩いていたら、突然4、5人に襲われ、はがいじめにされた。気がついてみるとウエストバックを鋭利な刃物で切り取られ、財布・パスポートが盗まれていた。

4、人混みの道路を歩いているとき、リュックサックを刃物で切り裂かれ、通行人から注意されたのでなかを調べたら、貴重品をすべて盗られていた。

5、バスのなかにスリがいた。入り口付近に泥棒がいるから来てみろ、といわれ立ち上がって入口に注意している間に座席のカメラを盗られた。

ケニアの日本大使館に行ってみると、学生風の若者がパスポートの再発行を求めて何人か来ていた。

パスポート再発行に必要なお金や帰りの航空券も盗られ困惑しているものもいる。

治安が悪い、とはこのことである、と思った。質が悪いのは相手はプロで旅行者はアマ

であるということ。注意のしようがない部分もある。

8, ケニアからタンザニアの国境 （ナマング）を越える



ケニアとタンザニアの国境ナマング
マサイ族らがみやげものを売のためにくり出している。国境検問所は社会主義国タンザニア入国時が厳しい。

3月1日（1997）ダバヌ社のシャトルバスでケニアから国境都市ナマングを経由してタンザニアのモシまで行くことにした。東アフリカをほぼ北から南に針路をとる。

このバスは10人乗りのマイクロで、我々以外は白人と黒人の観光客ばかり、ニュースタンレーホテル前を、午前8時半出発し、到着地のモシまで8時間かかる。途中ノーフォークホテルを軽由しそのまま南下していくので、観光客以外入り込む余地がない隔離された輪送空間だ。

ナイロビの市街地を抜けると、すぐに乾燥しきったサバンナに突入する。

ブラジルのカンポスやセラード、カーチングのサバンナとやや植生や動物分布が違うので、やはりここはアフリカを感じる。

らくだの放牧、駄鳥の群れ、牛群や山羊の群れもところどころに見える。

家畜の放牧に従事する人々も国境に近づくとつれ、キクユ族からマサイ族に変わっていく。

椎名誠はナイロビからナマングのあいだの風景変化を“人の住んでいるテリトリーと野生動物の住んでいるテリトリーがなんとなくじわじわ入れかわっていく”と表現しているが、確かにそんなイメージである。

マサイ族の男は赤を基本にした袈裟のようなものをまとい、ブッシュナイフをもち、家畜を追う槍のような棒（スピーレ）を持っているからすぐに見分けがつく。

本来、タンザニアに多い筈のマサイが国境を越え、ケニア側にも棲んでいるのである。

国境はナマングの町、遮断棒を1本上げ下げしているだけの場所。パスポートの検閲は簡単に済んだが、待ち時間は40分、その間物売りがやってきて“私達はマサイだ。マサイの作った首飾りや木彫品を買え”といったのはバスの外からせがむ。

国境を越えると社会主義国タンザニアだ。ここも通関手続きは簡単かと思っていたが“バスの屋根から大型のリュックを下ろせ”と命じ、“ピストルをもっていないか”，と疑う。

タンザニアに入って1時間も走ると左手前方に我々の目指すキリマンジャロ山が見えてきた。山頂付近の雲の動きが激しく、氷河を頂いている6,000m山頂が見え隠れしている。

ナマングからA104道路を南下する途中ロンジドウ山（2,629m）の火山突起があるほかは乾燥しきった平坦なサバンナであるから、6,000m級の山容は遠望しても迫力がある。

あちこちで竜巻が発生している。

同乗の英国人が、こちらを向いて「トルネード」とか「ウインドスクリュウ」とかいいい、盛んに合図を送ってくる。

私達の興味は、むしろマサイ族の姿や住居、時折展開する青空マーケット、畑の作物、家畜の構成など人の居住、生産条件であったが、かの英国人達の興味は、竜巻や野性動物などアフリカの自然現象であった。もっとも、一般観光客の興味関心は自然環境にあるように

思われるが。

この乾燥した砂漠のような地域にどうして人が住み着いたのか。最も、今は乾期、この後やってくる雨期には強い緑が蘇ってくるのであろう。

頭上に荷を乗せて歩くマサイの女性の姿が急に増えてくる。

女性の荷は、おもに水の入った桶である。タンザニア第2の都市アルーシャ近くになると、左手にメルー火山(4,556m)がそびえ、急峻な山容をみせてくる。

この山はロッククライミングの技術がないと登頂できない、とドライバーが説明する。

山の東方、約50km地点にアフリカ最高峰のキリマンジャロ山があるのだが、ここからは雲に覆われていて見えない。

国境のナマングからアルーシャまでは80km、1時間20分であった。

ダルエスサラーム、モンバサ経由ナイロビに比べこのルートの道路事情はとてつよいとの情報である。

アルーシャの街のノーフォークホテルで昼食をとったが、これはバイキング形式で9ドルとナイロビの宿泊費の2倍。

シャトルバスはすべて高額費用負担を強いっている。

この街に泊まり、翌日早めにマラングゲートに行けば、2,700mのマングラハット小屋までは到達できる。つまり、アルーシャもキリマンジャロ登山の基地であるのだ。

アルーシャとモシの間も80km。バスで1時間20分であるから当日分に相当する山道を歩ける距離にある。定期バスも1時間に1本この区間を走っている。

アルーシャの街に近づくと急に車窓から外の緑が濃くなる。

バナナとコーヒー(ブラジルのロブスターと違いキリマンジャロコーヒーは小ぶりのアラビカ種)が秩序よく栽培され、赤黒色土が大地を覆う。

アルーシャからモシ、さらにヒモまでの一帯は、標高4,500mのメルー山、5,900mのキリマンジャロ山の南山麓で、高山に雲がかかりやすく、雨量も相対的に多い地域だ。

雪融け水が谷に沿って流れ、山麓一帯に沃野を形成する。

他方では、キリマンジャロ山自身が全山玄武岩(バサルト)で形成されていることからモシを中心に広大な赤紫色大地テラローシャ地帯が形成されている。

これは、ブラジルのサンパウロ州やパラナ州と同じくコーヒーなどに適した肥沃な間帯土壌(母岩が風化して出来る土壌)である。

もう1つ、重要なことがわかった。

地形や土壌がより農業に適している沃野は大地主の所有するプランテーション農園で、区画も大きく、機械化も進み、整然としたコーヒー、バナナの圃場になっていることである。

しかも、バナナはその葉が強烈な太陽の日射を遮る「母の木」の役割をするから、常にコーヒーとバナナは交互の列状に植えられている。

さらにバナナとコーヒー樹を覆うようにジャカラングの巨木が陰を作りだしている。

実は、もっと正確に観察してみると、最初に「母の木」になるジャカラング木を植え、ある程度の成長を待ってコーヒー樹とバナナを植えていくのだ。

プランテーション農園は大規模経営で作物はおもに販売目的にしているが、零細な小農園ではコーヒーが商業的作物、バナナやタロイモ、野菜類が自給的作物なのである。

9、キリマンジャロ山の登山基地「モシ」

キリマンジャロ山は、高さも6,000m近くある高山であるが、その山麓は東西70km、南北40kmの巨大な山容を呈しているのだ。

その真南に登山に起点にもなっているモシ

の街がある。

キリマンジャロ山にへばり着いているような小さな街であるが、西のアルーシャと共に観光的性格の強い街といえる。

ナマンガからアルーシャ、アリボロあたりまでの乾燥した灌木のサバンナ地帯は主にマサイ族、メルー山の周辺はアルーシャ族、モシからヒモにかけてはチャガ族の生活領域とはっきり区別してもいいが、これらの種族が仲良く平和に暮らしている地域という印象だ。

モシの街にシャトルバスが着いたのは14時30分、ナイロビからは7時間、予定の8時間より1時間も早い。

モシのバス停に降り立つとタクシードライバーとキリマンジャロ登山を誘導しようとする客引きが取り巻くように進路を塞ぐ。

片言の日本語が彼らの武器だ。

摂氏35度にも達しようという暑さ、重い荷物を担いで北に15分歩いて宿のYMCAに着いた。もう汗だくである。予約しておいたわけでもない。大抵こうした宿は空きがある。

タクシーに乗らなかったのは“すぐだ”といわれたから。

YMCAは広大な敷地にプールや大ホールもあり、32の客室を持ち、敷地をぐるり鉄条鋼で張り巡らし、ゲートには警備の私兵がいた。

隔離された安全な宿であるし、キリマンジャロ山に登る人々もいるが、キリマンジャロ山麓でゆったりリゾート気分を味わうために訪れている者もいる。

宿代は朝食付きで2人（ツインの部屋）で15ドル、1人900円くらいか。

この宿もナイロビ同様、「地球の歩き方」で探したものであるが、鉄筋3階の閑静、かつ広々しているうえに部屋の窓から雪を被ったキリマンジャロ山とマウエンジー山（5,149m）の眺望が誠に美しい。

もちろん、プールサイドからの山々の眺め

も見事なものである。

10. キリマンジャロ登山の予約

キリマンジャロ山の登山ツアーは、日本の旅行エージェント各社も企画しているが、12泊程度で概ね50万円である。これに2日のサファリツアーを組み込めば60万円が相場だ。

事前の調査では、日本から、信頼できる現地の旅行社とコンタクトをとって予約することもできるが、あまり安くならない。

現地では、路上あたりで客引きまがいの男達が、安いツアーの販売合戦を繰り広げているし、小さな観光事務所を設けて、登山客を呼びこんでいるのも多い。

何故、これはど多くの人々がキリマンジャロ観光に乗り出すのか。

それは、タンザニア社会主義国が、こうした山々の登山に一定の条件をつけているからだ。

一般客の単独登山は認めない。必ずガイド、ポーター、コックをつけないと登山が許可されない仕組みになっているのである。

1人に対し国立公園入山料が100ドル、これは国家収入。山小屋の使用料20ドル、レスキュー費用20ドルを含め、ガイド、ポーター、コックの費用、食材費含めて4泊5日で480ドル（6万円）、5泊6日で580ドル（7.2万円）が現地の相場である。

1996年は、この相場より100ドル程度安かったが、今年になって入山料をはじめすべてが値上がりした。

従って、日本からのキリマンジャロ山ツアーも値上がりしそうな雰囲気が漂っている。

最短で登れば4泊5日で可能であるが、登頂率がぐっと落ちる。なんといっても6,000mの山であるから山頂付近の酸素は平地の1/2と低い。

高度順化のための停滞をホロンボハット（富士山頂とほぼ同じ3,720m）で入れ、2泊

する方法が一般的になっている。

そうすれば5泊6日が必要だ。

もう1つの理由は、例えば2人でキリマンジャロ山に挑むとすれば、ガイド1人、ポーター2人、コック2人が指定される。この5人の職種の分担はそれほど明確ではない。

山道を歩く時は5人がガイド、ポーターを兼用し、山小屋に着けば5人が共同して食事の準備に当たる。

2人の登山者に5人の随員、7名分の食材、時には水(キボハット、4,703mには水がない)を用意し、登山者の荷物も背負う。

登山者の荷物は15kg程度にせよ、といわれているが、彼らは25~30kg程度は運ぶ。背と両手、時には頭上にも乗せて。

かれらの登山に随行する5~6日間の賃金はせいぜい10~12ドル程度、従って登山客からのチップが重要な意味をもってくる。

一般的にはガイド40~50ドル、ポーター、コックは10~15ドルといわれているがこれはサービスに対する報酬であり、それより安くても、高くてもかまわない。

こうして毎日100人の登山客があれば、数百人の現地人(マラングルートは主にチャガ族)が雇用の場を提供され、収入を得ているのだ。

タンザニアの人々(労働者、農民の月収が20~30ドルであるとすれば)にとって大変な産業が成立していることになる。

我々は、ガイド、ポーター、コック合わせて5人、3月3日から8日までの5泊6日、1人570ドルという条件で、YMCA内で営業している「トランスキボ」なる会社のマネージャーであるカストロ・カペラと契約し、宿のディレクター、トーマス・リモに保証させた。

契約に慎重になるのは、契約後ドロンを決め込むインチキ会社が多いからである。

11, 登り口「マランゲート」から最初の宿泊基地「マンダラハット」へ



タンザニア側登山口は標高1860mのマランゲート。国立公園入山料100US\$, 他, 山小屋使用料, 安全管理料 (Rescue fee) 40US\$などを支払う。

契約時に宿舎でガイドのジョニー・バレリアン(46歳)が紹介された。キリマンジャロ登山のベテランだというふれこみであった。

彼はマラング村出身のチャガ族であるが、最大の難点は英語があまり喋れないことである。6日間も随行するのに意志が通じないのは心配だった。

他の4人は出発日マランゲートで紹介するとのこと。

ナイロビの町でキリマンジャロ登山を契約した北海道大学の学生2人が、“チップは全部で140ドル渡して欲しい”といわれた、との情報を受けて、我々は再度カストロ・カペラに確認したところ、上記のような基準はあるが“サービスが悪ければ、チップを渡す必要はない”と応えた。140ドルは高すぎる。

3月2日、朝9時にジープが宿に我々を迎えに来るとの約束は10時半に変更された。以後、彼らとの約束時間は殆ど当てにならないことが分った。

カストロとジョニーと我々の乗ったジープはモシからヒモ(モンバサとグルエスサラム、アルーシャに行く主要道路の分岐点)を経由し、標高1,800mのマランゲートに向か

った。

この間、周辺に展開する風景は、赤紫色土のテラローシャ地帯に種の蒔付けをするため、耕起をしている田園風景だ。

丁度雨期に入ろうとしている季節である。

タロイモ、メイズ(とうもろこし)、野菜などを作付るのだという。

所々、バオバブの巨木があり、その間を縫うように畝が線を描いている。

標高が1,200~1,300mくらいまで車道を登ってくると、あたりはキリマンジャロ・コーヒーとバナナが混在して植えられている地域が出てくる。

混在といえばごちゃごちゃしたように見えるが、実際はコーヒーとバナナが交互に列をなして植え込んであり、整然としているのだ。

複雑に見えるのは、そうした土地利用に覆いかぶさる感じでジャカランダの巨木があるから。

農家は、木の枝を枠組みにして泥を詰め込んだ家、玄武岩をレンガ状に切り出して積み上げたブリック構造の家、萱葺というか、禾本科系の萱のようなものを円形状に組み立てた家、など種類も多い。

貧しい、まるで小作人や奴隷の家のような。

マランゲートには鉄の扉があり、守衛が許可証をもっている人間のみの通行を許している。

その周り、ゲートの外に10数人のチャガ族の強じんな体をした男達がポーターやコックの仕事にありつけないかと、期待を込めて座り込んで順番待ちをしている。

ポーターやコックの手配はガイドの仕事であり、権限である。

ガイドは時に40~50人の臨時雇いを抱えており、キリマンジャロ山行の度に数人を指名する。

ポーターやコックは、自分の希望とは無関係に、1回とか、2回（毎月）仕事を割り当てられる。仕事の無い月もちろんある。

我々のポーターとなったピーターとリチャードは、月1回（1回で5、6日）の山登りが分担され、ポーターの仕事をジョニーが与えてくれるのだといていた。

ピーターは結婚しているが、子供はいない、リチャードは独身であった。

2人のコックはほとんど同行しないし、顔を見たのは下山時のチップを配るときだけなので名前も状況も分からない。

人員の調達や登山手続に手間どって午前11時予定の出発時間は、13時になった。

サンドウィッチ、バナナ、パンが昼食として渡され、またトイレットペーパー1ロールが配られた。山小屋には紙がないからだ。

スキーのストックが必要だから、と寄り添ってくる男がいる。2ドルでそれを借りた。これはキボハットからの最後の登りでかなり役立った、と思う。

マランゲートの標高は1,860m、今日の目的地は2,700mのマングラハットであるから標高差は840m、約6時間の行程であると告げられた。

熱帯の照葉樹林がジャングルを形成している鬱蒼とした道路を歩く。

サバンナのバオバブと違って山のそれはすっきり天に向かって伸びている。周囲がジャングルだから横に広がれないのである。

途中から山道になると、猿が出没し、ランに似たオレンジ原色の不気味な花が咲き、ゴム木が覆いかぶさるように繁っているの、あたりが暗く感じる。

下山してくる人との挨拶は、決まって“ジャンボ”である。

ジャンボはスワヒリ語で“こんにちわ”の意味で“おはよう”“こんばんわ”もすべて、このひとことですむ。

チャガ族の彼らは、必ず挨拶を返してくる。礼儀正しい部族だと思った。

途中、ベンチとトイレのある場所で昼食をとったが、ポーターのリチャードの体調が悪

く、何度も途中休憩を入れた。

なにせ、背負っている荷物が重すぎるのだ。

小川があって水が流れている。ガイドは我々に“飲めない”と言いながら、自分達では飲んでいる。

途中、中央大学の石原君と国学院大学の鈴木君のパーティーと一緒にすることが多かった。

彼らは1つ上の山小屋ホロンボハット (3,720m) で既に高山病に悩まされながら、停滞日ももうけず、山頂に向かった。鈴木君は登頂に成功したが、石原君はギルマンズポイントで引き返した、と後から聞いた。

彼らは日本から登山用具を持参せず、全ての登山用具はYMCAのトランスキボ会社からのレンタルであった。

午後4時前、第1日の宿泊地マンダラハットに着いた。予定より2時間早い。

12、「マンダラハット」(1泊目)の風景

マンダラハットは、照葉樹林のなかにあった。小屋もトイレもいくつかある。

日本の山小屋と違うのは、トイレが水洗である、小屋のなかのベッドが1人ひとりシェアされていて、それぞれに厚手のマットレスが敷いてある。レストランと寝室が区別されていることだ。

もちろん、この登山はコックがついているのであるから食事の用意はしなくてよい。

まるで、大名登山、貴族山行である。

食事のできあがるまで散歩したり、ウイスキーを飲んでゆっくりしていればよい。いままで、こうした登山をしたことがないので、いかにも拍子抜けの感がある。

マンダラハットの夕食は、豪華ではないが、洋食フルコースで、量が多い。

じやがいも、コーン (タンザニアではメイズと呼ぶ) のスープが出てくる、次がメインデッシュで牛肉、野菜サラダ、パン、チーズ

やバターももちろんついてきてポリウムは十分、デザートはバナナとパパイヤだ。

牛肉は今朝、マランゲートに向かう途中、商店とは思われない小さな小屋に吊してあったものである。

これを、この後冷蔵もせず4日間も喰わせるのか、と思うと少々うんざりした。

食事は、5日間とも食材がほぼ同じ、調理の仕方が少しづつ異なるだけであった。

食器類は、アルミか樹脂のもので、立派とはいえないが、すべて用意されているので持参の必要はない。

食事テーブルは、柄模様のクロスでどのガイドのグループか、わかるようになっている。

我々の隣は、南アフリカからきた白人の3人家族で、陽気な人々であったが、50歳代の父親はホロンボハットで高山病を患い、処置について相談をうけた。

太陽が沈んであたりは漆黒の闇夜、遠くにモシやヒモの街の灯が浮かび上がり、空は満天の星、南十字星を含め北半球とは星座が違う。

それに、星の輝きがすごくはつらつしている。

日本の山でも星空は美しいが、このサバンナ地帯は空気が乾燥しているせいか星が大きく見える。

13、「マンダラハット」(2,700m) から 「ホロンボハット」(3,720m) へ

3月3日。この日は、標高差1,000mの登攀、予定では6、7時間の行程である。

この日もよく晴れていた。

出発は、午前8時とガイドから知らされていたが、結局40分遅れとなった。

無理もない。彼らは、われわれの食事の後には飯を食い、食事の後かたづけをして、炊事場の掃除をした後、荷物をまとめて出発するのである。



マンダラハットとホロンボハットの間、標高3000m地点。ポーターたちが荷物を運び上げる。

後方に寄生火山が見える。

2人の登山客に対してガイド1人、ポーター2人、コック2人がつく。

昨夜は短い時間、強い雨が降った。

この雨で埃っぽい山道が適度な湿り気をもって歩き安い。

バオバブ、ユーカリ、ゴムのジャングルを30分も登り詰めると小灌木と草原の高山帯に出る。10日ほど前に山火事があり、小灌木が縦10km、横12kmに渡って焼失した、とポーターのピーターが説明する。

ヘリコプターが消火剤を撒いて消し止めたが、こうした火事はたまたまあるらしい。

原因は、たばこにある。だが、よく見ていると、喫煙者は登山客に少なく、ガイドやポーターらの現地人に多いのだ。

灌木は黒く焼けただけだが、生命力のある草は緑を蘇らせている。

幾つかのグループの数十人の登山者が列をなして進むのは見応えがある。

なだらかな山頂のキリマンジャロ山が前方に、右手には急峻な山頂をもつマウエンジー山(5,142m)がそそり立っている。

どちらも全山、玄武岩で成り立っているのだ。だからその風化土壌が山麓一帯に肥沃なテラローシャ地帯を供給している。

標高3,000mを越えるあたり、もう高山病で苦しんでいる人もいる。こいうときは少し戻

って高度順化をするに限るのだが。

高山病は体内の酸欠からおこる。体力の消耗が著しいと脳に酸素が届かず、はき気、めまい、頭痛が出てくる。

軽い脳障害だが、重度になると命にかかわる。

深呼吸で酸素を吸収し、水を普段の2～3倍飲んで体調の回復をはかるのがよい。

登山道の両側には、日本で見ることのない花がある。ウルップソウを巨大にしたようなロベリアは、この山の名花の1つ。丈1m以上もあり葉が根の付近にあるのみだ。

多いのはこれも背丈1～2mの木に5cmくらいの花がひまわり状につくキリマンジャリカ、濃いクリーム色であるが10日前の火事で沢山の花が焼け焦げていた。

標高3,500mあたりから10mにもなるサボテンのような巨木センシオ・コトニがある。この植物は黄色の花をつけているが沢山の流れるような湿地に多い。

日本にもあるものでは、マツムシソウ、シロタエギク、リンネソウ、ミネズオウがあるが、心なしか変種のようにもみえる。

ガイドのジョニーが「ポレポレ、ノット・ハレハレ」と何度となく繰り返す。

ポレポレはスワヒリ語で「ゆっくり、ゆっくり」の意味。ハレハレもスワヒリ語であるが、英語のハリーにも通ずる。

下りてくる黒人のガイドやポーターが我々を見ると「コンニチワ、サヨナラ」を連発するのだ。

日本人の登山客が比較的多いので、自然に憶えたものであろう。

6時間弱で標高3,720mのホロンボハットに着いた。

この小屋集落は大きい。登山の過程で停滞を入れ2泊する人もいるし、帰路、唯一の宿泊施設でもあるからだ。

遠くからみると軍事施設か、宇宙基地のようにも見える。各小屋の屋根にソーラー板が

取り付けてあるせいかもしれないが、このソーラーシステムはレストラン以外稼働しているわけでもない。

ここにも、ビール(0.5リットル~2ドル)、ミネラルウォーター(1リットル~3ドル)が置いてあり、金さえ払えばいくらでも飲める。

地ビールであるが、冷えていて実にうまい。街中のホテルでも富士山頂と同じ3,700m標高の世界でもビールの値段が変わらないのは、それだけポーターの供給人数があり、賃金が安い証拠だ。

夜はやはり、懐中電灯の世界である。

同室のイラン系カナダ人の姉弟(30歳前後)のうち弟は、キリマンジャロ山が2度目の挑戦だ(後日談ではこの弟、今回も登頂に失敗した)。姉のほうが、夜中3度も時間を聴くのでその都度起こされた。

羽毛のシュラフをゴアカバーにくるんで丁度よい暖かさ。外気はマイナス10度であり、真夜中の南十字星が見事であった。

3月4日午前6時、気温はやはりマイナス10度であった。

今日は停滞日、つまり、高度順化の体馴らしのための休息日である。4,000mポイントまで歩いて戻る3時間のトレーニングにしようとしてガイドのジョニーらと話し合う。

午前9時20分、キリマンジャロ山ルートからやや離れてマウエンジー山(5,149m)への登山路をゆっくりあるいて3,900mの「ラストウォーター・ポイント」、玄武岩の露岩がゴロゴロしている「4,000mメモリ・ポイント」に着いたのが丁度午前11時であった。

陽光は強く、暖かい気温であるが、小川は凍結している。

この段階では、全く高山病の兆候は現れていない。睡眠はやや不足気味であるが、水分の補給が十分なのと、深呼吸に気をつけているせいであろう。

南アフリカの3人家族がやってきた。

父親は、昨夜高山病に悩まされていたが、今日は元気を取り戻していた。

4,000m地点の景観は素晴らしい。雨期に入ったといってもまだ乾いていて、晴天の日が続いている。

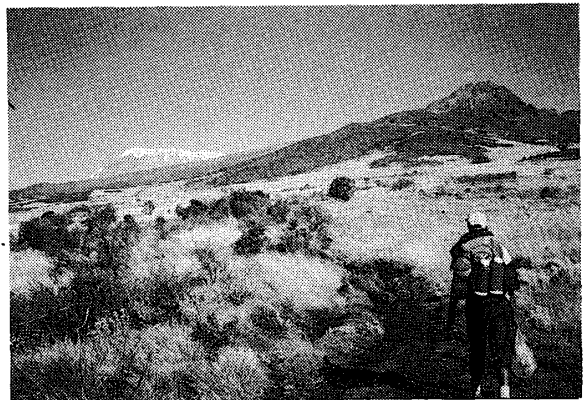
ホロンボ小屋付近では、コックやポーター達が夕食の準備のため、薪を拾い歩いている。

小灌木しかないこの世界では、燃料調達の仕事も大変である。

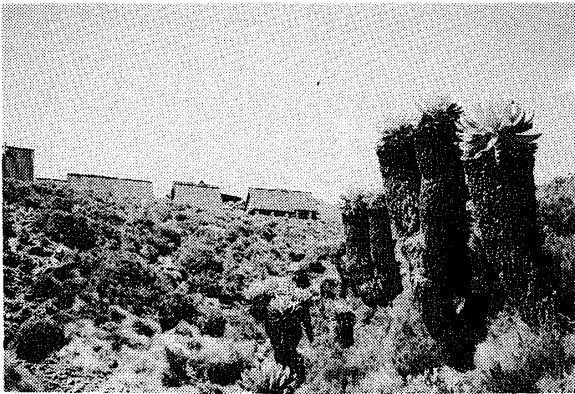
夕方、ガイドのリチャードにリードされ、北海道大の春名君(工学部2年)と松本君(文学部4年)が登ってきた。

2人ともに「恵廬寮」生であるが、松本君は、私の北大での「人文地理学」を受講したことがあるといい、「アメリカ滞在こぼれ話」のプリントで米国地誌をやっていた、と付け加えた。妙なめぐり合わせである。

彼らのガイドであるリチャードは、若い青年であるが英語が堪能であるため、その後は彼らと共に行動することによりさまざまな情報をより多く得ることが可能になった。



標高3500m地点、左手に雪を頂くキリマンジャロ山頂が、右手に5149mのマウエンジー山頂が見える。高山植物のキリマンジェリカやロベリア・ディケンニが咲き乱れる。



富士山頂にほぼ等しい標高3700mのホロンボハット。ここで高度順化のため1日停滞する。サボテンに似た樹木はキリマンジャロの名花センシオ・コトニーである。

14、「ホロンボハット」(3,720m) から 「キボハット」(4,700m)

昨夜のコテージは工藤君と2人だけであったから、ゆっくり人に気がねせず熟睡できた。

やはり、外国人と一緒にでは、国々によってしきたりや習慣も違うので気を遣う。

なにせ、私は大いび気をかくので慣れた者同志のほうが気は楽だ。

3月5日午前6時、キリマンジャロ山麓の東斜面に太陽が上りはじめる。西側を眺めると、キリマンジャロ山頂の氷河の部分から序々に照らし出され、やがて今日到達するであろうキボハットの付近まで明るくなっていく。

午前8時55分、ガイド、ポーターとホロンボハットを後にした。コックは後からくるのだ、とガイドのジョニーがいう。

午前9時の気温は丁度零度、太陽が昇ると、3時間で10度も気温が上昇するのだ。

9時30分、道中で最も美しい霊水場といわれる小川、水そのものは飲めるとは思えないが、草原にセイジブラッシュのような砂漠植生が繁茂する地域である。

10時20分、標高4,050mの「ラスト・ウオー

ター地点」、これは昨日高度順化のためのどり着いたマエンジー山にも同名の地名があったが、場所は異なる。

気温は16度に上昇している。

双眼鏡を眼にすると、キリマンジャロ山ピークに向かう登頂路が急斜面にジグザグな模様を描いているのがわかる。

そこまでの路面はなだらかで、ゆったりしているが広い道がキボハットに向かって続く。

何か、丘陵地帯を散歩している気分であるが、空気も薄く楽ではない。ガイドのジョニーがどんどん遅れる。途中待って追いついてもらすぐに遅れる。

無理もない、25kg以上の荷物を背負っているし、高度が4,300mを越えているからだ。

14時30分、4,700mのキボハットに着いた。

5時間半で標高差1,000mを克服したことになる。

この小屋では、12人のベッドのある部屋に入る。少々頭痛がする。

“来たな、高山病だ”と、とっさに思った。だが、途中日射も強かったので日射病かもしれない。

いまは水を飲み、深呼吸を繰り返すのみだ、と自身に言い聞かせた。

しかし、この宿には飲料水はない。ポーター達が運び上げてくる炊事用の水のみである。

ホロンボハットで3リットルの水を買求めたが、2日間持たせなければならない。

飲みたいが飲めない、そんな心境が続いた。

明朝の出発は真夜中だから、明るいうちにベッドルームにそなえ付けられているテーブルで夕食を済ませ就寝した。

食欲はあまりなかったが、ジョニーの運んできた熱い紅茶が旨く、何杯も飲んで水分を補給した。



標高4700mのギボハット。

石造りの小屋はポーター、ガイド、コックの宿泊施設であり、また飯のたき出し小屋でもある。

15, ギルマンズポイントを経由し、 キリマンジャロ山登頂に

3月6日真夜中の12時、ガイドのジョニーが起床を告げた。

頂上付近はマイナス18～22度と低温であるうえ、風が体感気温を一層引き下げると、トランスキボのカストロがいていた。

スキーズボンにダウンのヤッケで、ものものしい出で立ちになった。

ガイドであるジョニーの服装も昨日までとは、うってかわって本格装備を身につけている。標高5,000m位までは、踏みしめられた堅い火山砂の上を歩いていたが、やがて斜度が強まると富士山の砂走りのように2歩上り、1歩下がる感じで登攀能率が落ちてくる。

真っ暗闇のなか、風もなく、さして寒さも感じない。

ふと、下界を振り向くと、所々後からやってくる登山客の懐中電灯の灯りがゆらゆら揺れている。

前方に行く人々の灯はよく見えない。

斜度がどんどんきつくなる。ガイドのジョニーが「ポレ、ポレ」といってリズムをとる。

「急ぐな、ゆっくり歩け」といっている。

急に頭を針金で縛られたような激痛が走る。

「きたな、アンデスで経験したのと同じ高山病だ」と思った。

急に足の動きが鈍くなり、おう吐のため2度、3度と立ち止まり、休憩する。

工藤君も具合が悪そうで、話もしたくない身体的状況であった。

真夜中の朝食であったから、ほとんど食べていないので、おう吐といっても水分が少々出るだけ。喉はひりひり痛む。

「もう少しでギルマンズポイントだ」とジョニー。

このギルマンズポイントは、キリマンジャロ山カルデラの一角にあり、巨大なクレーターを望むことのできる展望地点で標高は5,682mだ。



標高5685mはキリマンジャロカルデラの一角ギルマンズポイント。

山頂のウフルピークはここより約2km、標高差200mである。左は奈良亘、右はチャガ族のガイド・グッドラック。

この地点で御来光を拝み、下山する人々がかなり多い、と聞いていた。

頭がガンガンして、今どの辺を歩いているのか、ぼんやりしている。

ようやく、東の空に明るさが戻り、陽光が射しはじめた午前6時35分、ギルマンズポイントに到着した。

先着の5、6人の登山者が休息していてほんやりインド洋方面に登りはじめた朝日を眺めている。

軽いリュックを肩から下ろすこともなく土の上に座りこんだ。このまま眠りこみたい感じであるが、さすが風が強く、寒さが厳しく正気を取り戻す。

眼下に見える巨大なクレーター、その両翼にそそりたつ大山岳氷河が屏風のように立ち並んでいる。

「これが、俗にいうキリマンジャロの雪か」と思った。

しかし、これは氷河であって雪ではない。いまは、雨期に入ったばかりで山頂の雪は、あまり降らないし、降ってもすぐに消えてしまうのだ。

零下20度の世界も太陽の光が強まるにしたがって、心なしか暖かい感じである。

椎名誠らの登山隊は1人を除き、ここで引き返したのだ。

15分休憩して、最高点のウフルピーク（5,895m）を目指した。

雲も少なく、展望もいい。それにこの日は登山道に雪がない絶好のコンディションである。

体調はよくない、高山病でフラフラしているが気力は大丈夫だ。

あと標高差200m、距離にして2km強だ。

アップダウンが続く。上りは極端に速度が落ち時折立ち止まるが、下りは比較的楽である。

工藤君も高山病で苦しみつつも、さすが札幌大山岳同行会のキャプテンだけある。私より先行している。

私も工藤君も、下山途中のパーティーのガイドから、「もう、下山した方がいい」と勧められた。しかし、ジョニーは「行ける」と励ます。

余程、フラフラして歩いていたのであろう。

それに、美しい山頂付近のカルデラ、山岳氷河、下界のサバンナの展望を写真に収めるのに時間がかかった。

山頂のウフルピークには、午前8時35分に着いた。山頂は比較的平坦で、眺望が優れている。

壁をなす氷河が平地から見える「キリマンジャロの雪」であろう。

アーネスト・ヘミングウェイの書き出しにある「豹の死骸」は奈辺にあったのであろうか。

もちろん、架空の話であるが、想像するだけでも面白い。

35分間、山頂で写真を撮り、ウイスキーを飲み、ゆったりした時間を持った。

気温は零下20度位あろうが、風も弱く、陽光を全身で受け止めるすばらしい瞬間であった。

多分、2度とくることはない山かと思うと遂長居をすることになる。誰もが山頂を踏むとすぐ引き返していくのに、ジョニーもよく長時間滞在を我慢してくれた、と感謝したい気持ちになった。

下山開始は午前9時10分、登りと同じ道を引き返す。

下りといってもアップダウンがある。ダウンは楽であるがアップはやはり苦しい。しかし、カルデラ壁の背の部分歩くのは、クレーターの中と外に展開する下界を眺められてなんとも不思議な世界であった。

40分でギルマンズポイントに着く。登りの半分以上の時間であった。

ギルマンズからの展望は、今朝の登山の起点になったキボハット（小屋）、そこからホロンボハットに続く比較的広い登山路、そして東前方には標高5,149mのマエンジー山とすばらしい景色が展開している。

ギルマンズを後に、暫く岩場を下りそこから深い砂の斜面がある。

ジョニーが私のリックを背負い、工藤君と

3人で肩を組んで結構なスピードでいっきに走り下る。

全身砂ほこりにまみれて、上り6時間かかった斜面を、たった40分で走り下りた。

高山病もいつの間にか消えていた。

キボハットでは、先に下りた北海道大の松本君の健康が優れず救急隊の要請をしていたが、20ドルもレスキュー費用を取っておきながら1輪車が壊れているとの理由で対応してくれない。

蚊に刺されてマラリアの可能性もあるとの同僚の春名君の心配をよそに、とにかく歩かせてさらに標高差1,000m下のホロンボハットまで自力で脱出させることにした。

肩を抱え、ずっとホロンボの小屋まで誘導したのは、彼らのガイドのリチャードや彼のポーター達であった。

16. ホロンボハットから下山

結局、松本君は強い高山病に悩まされていたため、高度が下がるに従って元気を取りもどしてきた。ホロンボでは、まったく平常な状態になっていた。これが高山病の特徴だ。ホロンボハットにこれで3泊することになる。

ここで、ケニア山(5,200m)に登頂したあと、キリマンジャロ山のピークを極めた4人組の若者達に会った。

ケニヤ山は山頂付近が急峻でロッククライミングの道具を持参し、岩登りの技術がなければ無理であるとの情報である。もっとも、案内書にもそう書いてある。

この後、ルエンゾリ山(5,110m)にも行くというので、中央アフリカのなみいる高山のハシゴをする勇気のある連中だ。

ホロンボからマンダラにかけては、もっぱら高山植物の鑑賞と写真を撮りながらの下山である。

小木に咲く黄花キリマンジャリカの大群

落、谷沿いの巨木センシオ・コットニ、ウルップソウを巨大にしたようなロベリア・デッケンニなどが広大な山麓を埋め尽くしていた。

キリマンジャロ山の標高3,000~4,000mの高山帯が、俗にいうお花畑であるが、大雪山や日高山脈に咲いている小さく可憐な高山植物とは違い、花のスケールが大きい。

帰路はもっぱら別のパーティーのガイドであり、英語も堪能なりチャードが案内役を努めてくれた。

帰路の山小屋での宿泊はホロンボハットの1泊のみである。

3月7日、一夜があけた早朝、ガイドのジョニー以下、2人のポーター、2人のコックの計5人が、幾つもの小屋のある中央付近で車座になって我々2人の来るのを待っていた。

5泊6日のキリマンジャロ山行の仕事に対してチップを受け取る朝である。

我々は、ガイドには30ドルとヘッドランプ、登山用多目的ナイフなど、他の4人には各10ドルずつチップを支払った。

彼らは、“少ない”と一斉に不満を述べた。

私は“、このキリマンジャロ山の旅行社トランスキボのマネージャーであるカストロの指示に従ったままで文句をいわれても困る”

彼らは、明日バスでモシに行き、カストロと交渉する、といったが、彼らの気持ちはサバサバしていたように思う。

カストロは“チップはあくまでもサービスに対する感謝の気持ちでサービスが悪ければ、1ドルも支払う必要はない”といい、一般的にはガイド40~50ドル、ポーターとコックは10~15ドルが基準であろう、と事前に付け加えていたのである。

北海道大パーティーのガイド、リチャードが”日本人は案内するのが楽しい、それは不平不満をいわないことと、チップを沢山くれ

るからだ” といっていた。

彼らが、西欧人に比べ、日本人に多額のチップを期待しているのは明らかだ。

文句をいえば増額が可能である、と思っている節もある。

ホロンボハットからマンダラハットを経由し、登山口のマランゲートまでは6時間ほどで到達する。

その間、彼らが特に不機嫌ではなかった。

ガイドのジョニーはコップにいっぱいウイスキーをねだったり、ライターをくれ、といったくらいのこと。

午後1時、我々はマランゲートにつき、5泊6日のキリマンジャロ山行は頂上のウフルピーク (5,895m) を極めて、成功裡に終了した。

モシの宿まではタクシーが送ってくれた。この費用も登山経費のなかに含まれている。

宿のYMCAでトランスキボの事務所に行き、カストロを尋ねてチップの件を話した。

宿のディレクターであるトーマス・リモも立ち会ったところで我々の立場を説明した。

彼らの答えは“全く問題ない”であった。

翌朝バスでジョニーとピーターがやってきて、カストロに抗議をしたが問題にされない。

タンザニアの労働者の賃金は月額20~30ドルである。1回キリマンジャロ山の仕事をしても1週間で10~15ドル程度の報酬しかない。

月2, 3回の仕事があればいいが、1回程度のポーターやコックが意外に多いのだ。チップは重要な収入源であることは確かであるが、日本人の安易なつり上げにも彼らに余計な期待感をもたせている。

17, キリマンジャロ山行で見えた自然環境

火山の形としては、実際には、コニーデ(成層火山=富士山形)であるが、頂上付近がトロイデ(吊鐘形)の感じがするキリマンジャ

ロ山は、広大な円錐の上に高さ1,000m以上のドームが乗っているようにも見える。

しかし、この山は間違いなくコニーデ型とっていいのではないか。

東斜面に巨大な寄生火山マウエンジー(標高5,200m)とシラ(4,000m)が突出している。

山頂部のカルデラは、直径2.4km、中央火口丘は比高60m、山頂部の火口の直径は820m、岩石は玄武岩(バサルト)が主体。

山頂のキボ峰近くにクレードナー、ブリーチ、レープマンの3つの氷河が屏風のように立ち並んでいる。

アフリカで最も高いキリマンジャロ山は標高5,895m、その裾野は東西70km、南北40kmにも及んでいて特有の山岳気象になるため、周辺地域に沃野をもたらし、モシ、ヒモをはじめとする人口集中地域を創り出している。

この山に降る雨や雪は、年降水量900~1,300mmであるが、ところによっては2,400mmにも達し、これらが地下水や河川となって山麓一帯を潤す。

3~5月、11~12月が雨期である。

同時に、キリマンジャロ山は全山が玄武岩に覆われ、これが風化して山麓にテラローシャ土壤地帯を形成している。

ブラジルのパラナ洲やサンパウロ州と同じ土壤地帯であり、土地利用の面でもコーヒー、バナナ、メイズ(トウモロコシ)、小麦、パパイヤなどが栽培されており、ブラジルとの共通性がある。

広大なサバナのなかにあって、キリマンジャロ山の南斜面は一種のオアシスとっていいであろう。

かつてはシザル麻やさとうきびも栽培されていたが、いまは少ない。

植生でいけば、標高2,700mのマンダラハット付近までは熱帯の照葉樹林帯が分布し3,000mからは高山帯でヒバ状の小木に覆われる。

3,700mのホロンボハットあたりは、谷川に沿いに巨木のセンシオ、あたり一面を覆うキリマンジャイカの花、あまり数はないがキリマンジャロ山の名花ロベリアが咲き乱れていた。

ホロンボハットは富士山頂とほぼ同じ高さ、急ぎ足で歩くと、すぐに息切れがする。

赤道に近いせいか、早朝はマイナスになっていても、日中は10℃程度に上昇する。

ホロンボからキボハット(4,700m)は、疎らな植生の高山帯で、ハイキングコースのようなゆるやかな上り、途中、マエンジー山のサドルを越えてゆっくり歩くのであるが、この辺りから高山病に苦しむ人々がではじめるのだ。

キボハットには水がないので、ポーターやコック達は、標高4,000mに近いラストウオーターポイントから飲料水を背負い、運搬していた。

登頂にかかる5日目はさすがに緊張する。

午後11時半起床、0時半漆黒の闇夜を出発、この朝は、もやのせいか、星空は見えなかった。

標高差1,000mでカルデラの壁上のギルマンズピークに到着するが、行程の2/3は斜度30~35度の砂走り、ギルマンズまで6時間半は高山病との闘いである。

ここから、引き返す人々が多いなかで、私と工藤君はウフルピーク(5,895m)を目指し、午前6時40分ギルマンズを出発した。

ギルマンズからウフルピークまでの2時間は巨大なカルデラ壁の縁を、キリマンジャロ山頂を覆う3つの氷河とクレーターを見ながら進む。

「ウフル」はインデペンデント、つまり独立の意味であり、タンザニアやケニアのビルや通り、記念塔や銅像に多い名前、もちろんスワヒリ語である。

ウフルピークは別名キボ峰だ。

山頂の気温こそマイナス20度程度である

が、風もなく雲もない、しかし、あまり見透しのよくない3月上旬であった。

(工藤・進藤記)



全山頂雪に覆われたキリマンジャロ山、下界は熱帯サバナ、山頂付近は極寒の氷雪気候である。
山体は東西70km、南北40kmに及んでいる。